

# 霊基No.16 カーマ



## PROFILE

身長：136cm 体重：33kg

インド神話における愛の神。  
このカルデアでは常に子供サイズ。

魔力供給回数：176回 絶頂回数：288回  
好きな体位：正常位 処女喪失日：召喚から10日目

妊娠確率：51%【安全日】

「こーんな子どもに欲情しちゃったんですかあ？  
別に良いですけど、ええ。  
どうなっても……知りませんよ」

## STATUS

絆LV 100   
Next 0

性欲：C	★★★★☆	知力：B	★★★★☆
体力：D	★★★☆☆	母性：C	★★★★☆
従順：D	★★★☆☆	反抗：B	★★★★☆
淫乱：C	★★★★☆	感度：A+	★★★★☆

「はいはい、良いですよ。付き合っただげます。  
でもその代わりに……たくさん愛してくれなきゃ怒りますからね」

# 霊基No.16 カーマ



## SECRET GARDEN EX

### SG1：お子様体型

このカルデアでは「何故か」この霊基でしか現界できない。他の子どもサーヴァントと一緒に扱われるのは不愉快だが、お菓子をたくさんもらえるので受け入れてはいる。

### SG2：悲観主義

基本的にネガティブで面倒くさがり。卑屈ではあるが根は真面目なので、口ではイヤイヤ言いながらも何だかんだ付き合ってくれる。

### SG3：溺愛願望

愛に愛する少女。悲観的な姿は「自分を強く愛してほしい」という願望の現れ。とはいえたっぷり愛されてしまうと、それはそれで恥ずかしさがオーバーフローする。

## WEAK POINT

**leg** : ★★★★★☆

面倒くさがりな彼女は嫌がらせとばかりに足蹴にして弄ぶが、そうすると何故か喜ばれカーマは困惑した。

**lip** : ★★★★★☆

唾液をたくさん交換し合うような激しいキスが好き。してる最中も必死にキスをねだり、舌を積極的に絡めようとしてくる。

**vagina** : ★★★★★☆

お決まりのような挑発を繰り返すのは、そうした方が強く愛してもらえるから。段々と激しさを増し、全体重を掛けたその種付けプレスには何をしても抗えない。

## LIVE



状態：♥♥♥

「えー、こんな子どもの卵子も捕まえられないんですかー？」と挑発するカーマ。馬鹿にしているのではなく、焚き付けているのだ。

レイシフト。それは魔獣たちの世界に飛び込む、危険な試みである。

「■■■、■■■、■■■——！！！」

そこで自分たちを咆哮と共に出迎えたのは『竜種』ドラゴンだった。

翼があり、表皮うろこがあり、大地に四肢を降ろす存在。

強大で、凶悪で、地上を睥睨する翼竜たちの王。—— “悪竜”

自分たちが相手に行っている生物とは、まさしく神話を生きる桁違いの存在であることを痛感させられる。ただの吐息ですら地上を焼き焦がすほどの、そんな常識の埒外にある怪物だ。

「ジャックは右前方から切り崩して！ 武則天は支援サポートおねがい！」

「うん、まかせて！」

そんな強大な敵を前に、一騎のサーヴァントが颯爽と地上を駆けていった。

アサシンのサーヴァント、ジャック・ザ・リッパー。

小柄な少女は一对のナイフを手に、竜種の牙や爪と互角に渡り合う。どれもが鈍重で鋭利にすぎない一撃だ。それをジャックは持ち前の身軽さで回避し、受け流す。そして——  
都合、十閃。隙が生じた一瞬のタイミングに、斬撃を幾重にも叩き込む。

「えい！ やあつ！ あはは、こっちだよ！」

「■■■、■■■ツツ——！！！」

「ふむ……なれば妾も、女帝としての責務を存分に果たそうかの。俗に言う ”ばわーあつぷ ” という奴じゃ。ふふん、今更泣いても遅いぞ？」

畳みかけるような連撃に邪竜が叫ぶ中、もう一人のアサシン・武則天は高らかに笑った。  
スキル——『女帝のカリスマ』。少女が持つ為政者としての王<sup>オーラ</sup>気。

不夜城のアサシンたる彼女は、宣誓一つで以て仲間の士気を高めてみせる。それは最前線をひた走るナイフ使いの少女も例外ではない。

「わわっ……!!」

攻撃力、そして敏捷力の強化。

一時的なステータスアップを受けたジャックは、驚きと共にそれを実感した。

先ほどまでも恐ろしく俊敏だった少女の動きは、武則天の加護を受けて更なる加速を果たす。

もはや目にも止まらぬ速さと称して差し支えないだろう。敵の爪牙と火花を散らせる彼女だったが、その一撃がついには邪竜の刃を打ち砕き――。

「解体するよ……!!」

「――ツツ」

実に少女の身体ほどもありそうな爪が、刃が、微塵の如くに粉碎された。

驚愕と苦悶は怪物のもの。蹂躪するだけの矮小な存在に、己の肉体の一部を砕かれたの

だ。それは驚愕というより、恐怖のそれに近いのかもしれない。

（——来る。宝具級の一撃、真正正銘、最後の一撃だ！）

途端、感じ取ったのは今までにない怪物の凶悪な敵意だった。

押されているが故の、追い詰められたが故の判断か。

口腔を大きく広げた竜種は、その体内で巨大な魔力を燃焼させる。それこそは、必殺。敵を滅却することだけを考えた特大な一撃。すなわち——真なる<sup>ドラゴンフレズ</sup>竜の吐息”に違いない。

刻一刻と魔力を高める邪竜。その迫力に全身が総毛立つ。

アレを防ぐ手段をこちらは持ちえない。放たれたが最後、地上一切を滅ぼし得る火力に対抗する術など皆無——否、手段なら存在した。可能性なら確かに残っていた。

「カーマ！ 令呪を使う、頼む……宝具を使ってくれ！」

7 「はいはい、いいですよ。命令とあらば、射ってあげます。その代わりに、ちゃんと後でござ

美く下さいね。こんなのに頼るなんて、本当にどうかと思うんですから」

気怠そうに答えたその少女は、ゆっくりと攻撃の姿勢を構えた。

自分の右手に刻まれた真紅の紋様・令呪の一面を消費し、極大な魔力を供給することで可能となった神秘の一撃——つまりは、宝具の開帳。

クラスにしてアサシン。三騎目のサーヴァントである彼女は、さながらアーチャークラスも同然に矢と弓を構え、そして照準を固定する。

それこそが、彼女の持つ宝具の一射にして。

サトウキビの弓と花で飾られた矢。カーマという女神が有する『愛の矢』。今まさに、その一撃が放たれる。

「射ちますッ——！」

「■■■■——ッッ——！」

互いの必殺が放たれるのは、ほとんど同時だった。

コンマ一秒早く、怪物の熱息が放たれる。空間を焼き焦がす火炎の一撃に、逃げ場など存在しない。自分たち諸共大地を呑み込み、焼却するだろう。

しかし女神の宝具は、そんな怪物の攻撃を正面から撃ち貫く。

元は対人宝具、射られた者に情欲を呼び起こす逸話の象徴に過ぎない。だが、令呪による魔力ブーストを載せた今、その一射は破軍の威力を爆発させた。閃光となって駆け抜けていく一条の矢は『竜の吐息』を粉碎し、その勢いのままに怪物を射抜いて――。

「――はい、おしまい」

そんな宣告と共に、宝具の一撃は敵の霊核を正確に撃ち貫いた。

これこそは、アサシンである彼女の持つ宝具『愛もてかかれは、恋無きなり』。

つい先日カルデアに召喚されたばかりの彼女は、インド神話における愛の神にして、とある少女の肉体を依り代に現界した疑似サーヴァントだ。

なるほど、確かにその実力は申し分ない。女神というだけあって、サーヴァントとしての彼女の力量は強力の一言に尽きるだろう。

「はあ。今日のお仕事、これで終わりですか？ 疲れちゃったので、早く戻って甘いモノでも食べたい気分なんですけど」

億劫だと言いたげに、カーマは溜息を零す。

その背中では宝具の直撃を受けた怪物が魔力の粒子となって消滅を果たしていた。

「うん、おつかれ。ありがとう、カーマ」

だから自分も、劳いの意味を込めて彼女の頭を撫でてあげた頭を撫でてあげた。

称賛の意味を込めた、俺に出来る唯一の感謝がそれだ。そのつもりが——途端、少女が憤慨した。

「って、な、なんでいきなり頭を撫でるんですか！ なんのつもりですかあ！」

「え？ いや、ご褒美が欲しいっていうから、てっきり……」

「な、違っ……私が欲しいって言ったのは、甘いケーキとか美味しいお菓子とかって意味です！ 別にそれをご褒美っぽいものを例に出しただけで、私自身が甘いモノが好きとかそういう話ではなく——そうじゃなくなって！ 子供あつかい、しないでください！」

少女が顔を真っ赤にして（早口で）告げる。

自分としては純粋な気持ちで、ちょうど良い高さに頭があったからこそ「そう」したのであって、それがカーマには「子供あつかい」されているようで我慢ならなかったようだ。

（その割には、けっこう子供っぽい部分があると思うんだけどなあ……）

思わず心に浮かんだ疑問を、苦笑しながら呑み込む。

口に出してしまえば、更に怒られるに違いない。うん、きっとそうだ。やめておこう。

「じゃあじゃあ、おかあさん！ カーマの代わりに、わたしたちのこと褒めていいよ！」

11 「あ、こらあ！ 妾を差し置いてとか、不遜すぎてビククリするーっ！」

途端、ひよっこりと姿を現したのはジャックと武則天だった。

二人ともおぼおぼと頭を差し出し、先の戦いを労ってほしいと見える。

無論、それを拒む理由は無い。二人の力があってこそその勝利だと理解しているし、こんな可愛いサーヴァントたちを無下になど許されるはずがなかった。

「べ、別に羨ましいなんて思いませんし……何とも思っていないませんし」

そんな中、カーマはぶつぶつと文句を言う。

カルデアに召喚されて以来、少女には悩みがあった。

他人からすれば些細な、けれども自分にとっては重大な問題である。

（くっ、この人……！ 初めて会った時から、ずっとこんな感じ……！ いつもいつも私のことを子供あつかいして、褒めたり、甘やかしたり、ああもうっ何考えているんですか！）

ギリギリと歯ぎしりさえ聞こえてきそうなほどの屈辱を少女は向ける。

確かに、今の自分は正真正銘「子供」である姿をしていた。

しかし、愛の神である自分は、『身体無き者』である自分には、年齢感と共に靈基状態が変質するという特異な性質がある。

それを使えば、彼と同じくらいの年齢の……いやそれ以上の姿に変貌することなど造作もなく、つまりして、自分の本質が子供ではないということの証明でもあった。

——尤も、それはあくまで設定上のことで。

——このカルデアにおいては、(どういうわけか)一切発揮されないスキルではあったが。

(いいです、今に見ていなさい——)

少女は。カーマは、不適に笑う。

(そうやって私を子供あつかいしていると、すぐに後悔するんですから。愛の神の本当の恐ろしさ、思い知らせてあげます！)

∞  
∞  
∞  
∞  
∞

——マイルーム。

身体が熱い。なんだか寝苦しい。

正体不明の焦燥感に、何かがおかしいと異変を理解した。

「熱、でもあるのかな。いやそれにしても——」

「あら？　ようやく起きたんですね。人類最後のマスターともあろう人が、こんなに無防備に寝ているなんて……こわいこわい『獣』さんに襲われても知りませんよ？」

目を開けた瞬間、視界に飛び込んだのは——。

「……なんだ、カーマか。こんな夜中にビックリさせないでよ」

驚いたような、安心したような。

見知った顔の少女の出現に、溜息にも似た安堵を吐き零す。

「なんだとは失礼ですね。せっかく愛の神であるこの私が夜這いに来てあげたのに……もつと喜んだらどうなんですか？」

ベッドで目覚めた自分を、見下ろすようにして少女は告げる。

時刻は深夜、誰も彼もが眠りに就いた時間帯だ。

夜這いなどという冗談はさておき、果たして何用だろうか。今日は戦闘シミュレーションの連続で身体は疲労困憊なのだ。出来れば寝かせてほしいのが本音である。

「む……なんだかノリが悪いですね。でもまあ、すぐにやる気になるでしょうし、マスターさんにはもう少しそのままでもいいと思いますね」

「何を言って……——ッ!?!?」

途端、異変を理解した。

少女が愉快そうに見つめる理由、その正体。つまり——身体が動かないのだ。

「おま、えっ……まさか『魅了』を——」

「ようやく気付いたんですか? そうです、正解です。私の宝具『愛もてかれるは、恋無きなり』……アレを、こう……えいっ♡ とマスターさんにぶっ刺したんですけど……」

「刺っ……!?!?」

待て待て、それは色々大丈夫なのだろうか。

仮にも宝具、生きた心地がしないんですが。

「安心してください、ちゃんと手加減はしましたから。でも……そうですね。マスターさん

の身体の『一部分』は、大変なことになっちゃってるかも……しれませんがね♡」

そう言って、カーマが視線を下げる。

紅色の腫が見つめるは、俺の身体の下半分。俗に股間と呼ばれる部分に他ならない。

そして気づいてしまった。

息も荒くなるほどの高揚感の理由。ある一点に集中する熱量の正体。それは、はち切れんばかりに起立した自らの愚息を見れば、自ずと理解された。理解されてしまった。

（確か、カーマの宝具——その効果は——）

混乱する意識の中、自分は正確に思い出す。

カーマが持つ『愛の矢』、それは刺さった者に情欲を引き起こす代物。

古くはインドの神格・シヴァに向けて射られた逸話を元に再現された宝具であり、早い話が『性交を誘発させる』のだ。その効果の程は、見るも禍々しく勃起した自身の陰茎を見れば一目瞭然だった。

「わー、すごい。マスターさんのおちんちん、ズボンの中で苦しそー」

あまり感情を込めず少女が語る。

魅了され動けずにいる自分にそれをどうにか出来るワケもなく。

少女もそれを分かって、わざとらしく笑った。

「ふふっ、私が何の用事で来たのか……でしたっけ？ 今日『仕事』をしに来たんですよ。愛の神らしく……マスターさんのことも、ちゃあんと愛してあげるために——ね♡」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ほらほら♡ こんなのが良いんですか？ ここが気持ち良いんですか？」

静謐とした一室に、少女の哄笑が響き渡る。

彼女がその足指で弄んでいるのは、自身のイチモツに他ならない。

「ッ……！」

「あつ、またビクンってしましたよ。私に足でされるの、そんなに気持ち良いんだー」

こちらの反応を嘲るように、カーマは笑う。

少女もベッドに腰を下ろしながら——動けない自分の肉棒を——その繊細な足さばきで以て愛撫する。剥き出しになった陰茎を、まるで玩具か何かのように。身体がある種の金縛り状態にある以上、抵抗は不可能だ。

「んっ……私みたいになっちゃう女の子にされて喜ぶなんて……♡ マスターさんて変態なんですわね、恥ずかしいと思わないんですかあ？」

楽しそうな、馬鹿にするような、そんな嘲笑。

屈辱であることは違いない。だというのに——少女の指が肉棒を擦る。その動作一

つにすら、自分の身体は恥ずかしくも反応を見せた。

カーマはそれを見て、尚も愛撫を続ける。

絶妙な足裏の柔らかさを使い、巧妙な指使いですりすり、と。

実に小学生程度の少女の姿をしたカーマだが、その嗜虐的な笑みには大人ですら戦慄を覚えるだろう。足蹴にされ、罵倒されているというのに——ああ、身体は正直だった。

「ほんと変態なんですねえ。でも安心してください♡ そんな変態でどうしようもないマスターさんでも、私は……愛の神である私だけは、愛してあげますから」

少女がさすさすと、まるで「頭を撫でる」かのように肉棒を優しく扱く。

なるほど、これはある種の意趣返しであるのだろう。

子供扱いされたことへの不満、その仕返し。

自分の尊厳を悉く打ち崩し、その上で慈愛を向ける……この上ない勝利を見せつけるために。

「ほら、もっと頑張ってください。こんなに早くぴゅっぴゅしちゃうとか、変態さんな上に

早漏さんとか許されませんか？ ふふふ、まあそれでも私は愛してあげますけど♡」

カーマの指先が、肉棒の裏筋をツーツとなぞる。

執拗な愛撫の猛襲に、陰茎を欲望が込み上げつつあることを確かに感じた。

だが耐える、持ちこたえる。

ああも変態と罵られ、そのうえ早漏の侮辱を受けようものなら、マスターである自分のプライドは微塵に碎かれるに違いない。

それだけは何としても避けねば——そんな俺の奮闘を察したのか。

「じゃあ、こういうのはどうですか？ よく見てください、私の恥ずかしい部分……♡ 正真正銘、幼女の新鮮おまんこですよ♡」

ちらり、と。

服の一部をたくし上げ、カーマは己の陰部を露わにする。

小鹿のような両脚に挟まれた、神秘の領域。綺麗であどけない一筋の割れ目。穢れを知らず、いまだ純粹であるような少女の淫裂——聖域。

あろうことにカーマは、秘するべき自分の秘部を自ら曝け出してきたのだ。あまりに幼すぎる部分を見てしまったことで、肉棒は更に興奮を果たす。ロリスジを見せつけながらの足コキ……攻め方としては、凶悪にすぎた。

「ふーん、やっぱり好きなんですね。おちんちん……すっごく硬くなってる……♡ 変態さ  
んで、早漏さんで、そのうえロリコンさんとか、本当にどうしようもないですね♡」

「カー、マ……!!」

「はいはい、分かっていますよ♡ 精液、びゆるびゆるしたいんですね？ 私の足で気持ち良くなりたいんですね？ ふふっ、ほんっと最低……♡」

嘲笑するセリフも、今は受け入れるしかない。

肉棒を擦り上げる刺激。亀頭を撫で回される快楽。

そのどれもが自分に限界が近いことを悟らせた。

少女の陰部は、そんな自分を誘惑するようにひくひくと揺れる。おそらくは初めから下

着を履いていなかったのだろうが、その効果は絶大だった。

「いいですよ♡ ロリコンマスターさんの、よわよわチンポ……無様にみじめに射精させてあげますから♡ ほら、ほら♡ 愛の神にイカされちゃってください!」

カーマが足の動きを加速させる。

先ほどまでとは比較にならないほどの刺激に襲われ、自然、必死に繋ぎ止めていた我慢の壁は、いとも容易く決壊した。

その瞬間——。

「きゃっ♡ ん、あっ……すごい、量。よわよわチンポのくせに、射精だけは立派なんです。ね。そんなにびゅーびゅーしちゃって、ほーんとマスターさんってば変態です♡」

刹那、限界を迎えた肉棒は、溜め込んでいた衝動を一気に放出した。

全身を凄まじい解放感が襲う。それに従い陰茎は音を立てて精液を吐き出していくが、そんな光景をカーマは愉快そうに見物する。

（ふふん、どうですか。どんな人間も愛の神には逆らえない。私が愛してあげれば、すぐに情けない声で泣いちゃうんですから）

びゆるっ、びゆる、と。

軽快に噴き出る精液を、足の指で弄ぶようにしてカーマは笑う。

その笑みには、目の前の少年を文字通り屈服させたことへの愉悦……達成感にも似た感情を浮かべているのだろう。

なるほど、それは確かに嬉しかったのだろう。愉しく、そして痛快だったのかもしれない。

だが、これで終わりだと誰が言った。

あれだけ罵倒され、それで平静でいられるほど自分は大人じゃない。馬鹿にされれば、意地の一つや二つ、見せつけたくなるというものだ。

「あら？ ……もしかして抵抗する気ですかあ？ よわよわチンポのザコザコマスターさんのくせに、愛の神である私に一糸報いようとか……淡い期待しちやってます？」

ああ、その通りだ。

侮辱も、罵倒も、それ自体は受け入れよう。

君の言う通り、俺はよわよわなのかもしれない。

けれど、自分は仮にもカルデア唯一の——人類最後のマスターなのだ。人理のためにも。自分を慕ってくれているサーヴァントたちのためにも……馬鹿にされたままでは終われない！

「ッ——オオオオオオオッ！！！」

(なっ、『魅了』を強引に突破した——ッ！？)

驚愕にカーマが目を丸くする。

ただの人間が自分の支配を打ち破った、そのことが信じられないといった様子だ。

だが、この世には気合一つで何でも出来る人間がいると知れ。

人理を背負ったマスターに不可能は無い。彼女の宝具は確かにこの身体を縛り付けただ

ろうが、同時に情欲を——沸騰するような性欲をこの身にもたらしたのだ。

「ちょ、ちょっと……!! なんのつもりですか……!!」

拘束を抜け出し、カーマをベッドに押し倒す。

一方、押し倒された少女はと言うと、ジタバタと激しい抵抗の様子を見せていた。

このような展開になるとは、微塵も想像していなかったのだろう。カーマはすぐさま体勢を立て直し、脱出しようと試みるが——そうはさせまいとして、少女の眼前に硬さを取り戻した我が『宝具』を展開する。

「も、もしかして、それで私を服従させたつもりですかぁ？ マスターさんのよわよわチンポなんかで、この私を従わせられるとで——モ」

途端、カーマの言葉が不自然に停止した。

あり得ない、と何度も否定する。

そんな馬鹿な、と何度も否定する。

眼前に突き出された肉棒……それを目の当たりにして、少女の胸裏を不思議な感覚が支配していった。興奮——とも違う。経験したことのない感覚だ。

(あ、あれ……？　なんで、これ——)

ごくり、と少女は生唾を飲み干す。

(こんなの、何ともないはずなのに……！　心が、本能が、マスターさんのよわよわチンポに『勝てない』って平服しちゃってるっ……！?)

息も荒く、カーマはそれを見開いて見つめていた。

まるで強力な催眠状態にあるような違和感だ。霊基全てが目の中の男根にひれ伏した、そんな状態。人間に押し倒されたところで、強引に抜け出せばいいだけのはずが——それが出来ない。本能が土下座してしまっている。

27 「い、一体なにをして——んんんっ!?　ん、んお、お、んぶ、んふう……:♡」

混乱しているカーマの言葉を遮るように、自分は強引に肉棒を突き出した。

少女の硬く閉じられた小さな口を力づくで突破し——挿入。

いきり立った肉棒は彼女の口内を余すところなく蹂躪し、一方的な愛撫で以て少女の口を征服する。獣の如き嗚咽が涙交じりに漏れ出すが、尚も抽挿を繰り返し——。

「ん♡ んむっ♡ ぢゅぶ、ぬぶっ♡ ん、んん、んぶあ——にゃ、にゃに、しゅるん  
ですかっ……♡ いきなひ、おちんちん突っ込むとか……♡」

息も絶え絶えに訴えるカーマ。

舌をだらしなく垂らし、胡乱な瞳で見上げてくる少女に、先までの余裕は存在しない。

そう、自分が求めたのは彼女のこんな姿だった。

調子に乗りすぎたサーヴァントには、灸をすえてやる必要があるだろう。端的に言うところのサーヴァントを「分からせたい」のだ。そう心に決めたのだった。

だから——。

「つて、えっ!?! えっ!?!? ちょ……待ってください! 無理です! この身体でそのサイズは絶対に入りませんってばあ!」

カーマは必死に泣き叫ぶ。

自らの陰部。少女特有のあどけない入口に。今か今かと開花の時を待つような可憐な蕾に。その上から押し潰さんとして装填された陰茎を見れば、何をするのか——いや、何をされるのか。分らないはずもなかった。

確かに、自分のそれと比較しても、少女の膣口は狭量にすぎるだろう。

ともすれば挿入さえ儘ならぬほどのサイズ比で——それがどうした!

「ひぐっ……!?!? ん、おっ、おおおおお……♡ こんにゃ、の……む、り……なの  
にい……♡ ん、おっ……おくっ、子宮、つぶれちゃっ……ひうッ、はっ、あっ……  
や、ああッ♡」

勢いをつけ、一息に突き入れたその一撃は、少女の純潔を瞬く間に奪い去った。  
ギチギチと締め付ける肉ヒダの感触。簡単に到達せしめた最奥の触感。

少女の秘所へ強引に侵入した征服感、全身にゾクゾクとした快感を奔らせる。一方のカーマはというと、肉棒を挿入されただけで意識が飛びかけたのか……身体を弓のようにしならせ、顔を上ずらせる……そんなノックアウト寸前の様子を見せていた。

「や、あ……ほんとうに、挿れる、なんてッ……♡ 私が、愛してあげるって……ん、あ……言った、じゃないですかあ……♡」

「うん、だから今度は俺がカーマを愛してあげようと思ってるね。ほら、伝わる？」

そう言って、トン、トンッ——と。

まるで扉をノックする軽快さで、少女の子宮口を優しく小突いてみせた。

それだけでカーマの身体は何度も跳ね上がり、結合部からは愛液が勢いよく弾け飛ぶ。必死に歯を食いしぼるカーマだったが、今ここに形勢は逆転した。彼女の言葉を借りるなら、ここからは俺が彼女を「愛してあげる」番だった。

「ひゃ、あぐっ——ん、はあっあんッ、やっ……♡ ん、あんっ、はっ、はッ……♡

やあ、ダメえ……♡ おちんぼ、動かしちゃっ……ひううんッ♡ あっ……おっ、んお♡  
むりっ、ほんとうにムリ、ですっ……♡」

腰の律動を開始させると、カーマの弱々しい嬌声が聞こえてきた。

突いて、押し付ける———そんな挿挿運動。幼い少女の膣道を一心不乱に駆け回り、  
攪拌するその動きは、カーマに耐えがたい苦痛と快楽とを与えているようだった。

「そこ、ダメえ……♡ 子宮、イジめちゃ……あくっ、はっ、はあ……こんなハズじゃ、ないのにい……♡ あ、んんっ、なんでッ……気持ち、イっ……気持ちよく、なっちゃ……ダメなのに……はあんんっ♡」

もはや抵抗の意思さえ沸き上がらないような———。

カーマは、押し寄せる快楽の津波に辛うじて持ちこたえてみせる。

自分の膣内をああも激しく犯されているというのに、流石と言うべきか。

(それにしても……)

疑問に思ったのは彼女の口ぶりだ。

気持ち良くなつてはならない、という快樂を拒むようなセリフ。

それは、彼女が「愛の神」であるからこそその拒絶なのだろう。

人間を愛し、万人を愛する女神。

全てを嫌いながら、全てを愛すると宣言する少女。

だが、その中にもたった一人だけ彼女の「愛」の対象とはならない者がいる。誰よりも暗く、面倒くさい、絶望に馴染みすぎた存在。自分自身だけは愛せない——と。

愛を気持ちよくなることと仮定すれば、彼女の拒絶も納得できる。

愛されてはならない。

気持ちよくなつてはいけない。

ただその思いばかりが先行して卑屈になりすぎるサーバントには。そんな彼女のこと  
は——他でもない、マスターである俺が愛してやらねばならないだろう。

「……え？　いま、なんて——んむう！？　んふッ、じゆる、ずちゅっ……ぢゆるるる  
♡　じゅぶ、ぢゅぶッ、んちゅう………ふぁ♡」

不意を突くような口づけに、少女は驚きながらもそれを聞いた。

「あ、愛？ わたしを、愛そうって言うんですか……？ こんな、私を——ん、あっ……よ、余計なお世話ですっ！ 貴方なんかには、愛してもらう必要、なんか——んああっ♡ はっ♡ やんっ♡ ん、あっ、嬉しく、なんてっ——きゃあああっ♡」

愛を証明する方法など、結局のところ行き着く答えは一つである。

カーマには悪いが、これは俺が決めたことだった。

彼女を精一杯愛すると決めた覚悟に、嘘を吐くワケにはいかない——だから。

「ん、はあ……これ、奥っ……♡ 激しすぎて、壊れちゃっ……♡ 分かりました、分かりましたからあ♡ マスターさんのこと、バカにしたことは謝りますっ……だからあ♡ これ以上、気持ちよくしないでくださいっ……♡」

「……いや、まだまだ！ もっと愛を教えてやる、カーマ！」

「んああああ……♡ やっ、ダメっ……♡ イクっ、これイクッ……♡ おちんぼ、凄すぎ  
て……おまんこ死んじゃいますっ……♡ イクイクッ、凄いの来ちゃうっ……♡」

こじ開けるように執拗な抽挿の連続に、ついにはカーマが降参宣言をする。

だからと言って、進るこの情動がすぐに収まるといふワケではない。加速しきった列車  
がすぐには止まれないのと同じで、際限なく加速するこの動きが止まるには、文字通り彼  
女の膣内に全てを吐き出す以外に手段は無いのだ——と。

自分より幾分も小さい、それこそ覆い尽くせそうなほどに小柄な少女を征服。

まるで上から押し潰すような体勢での抽挿に、自然、少女も無意識の内に足を絡めてい  
た。

(あ、だめっ、これ逃げられない……マスターさんに膣内出しされちゃう……♡)

肉棒を幼膣でしっかりと啜え込み、男の精を受け入れようと待ち構えるカーマ。

(子宮が、身体全体がっ、マスターさんが欲しいって喜んじゃってる♡)

思考とは相反する全身の昂ぶりに、自らの精神が屈服しつつあることを理解した。

「んっ♡ あっ、らめっ♡ ちんぽ、押し付けちゃっ……♡ これじゃ……愛されちゃうっ♡ マスターさんに、愛されちゃいますっ♡」

小刻みな絶頂の波を漂いながら、カーマはやがて来る巨大な津波を予感する。

さて、こちらもそろそろ限界だ。

更に一段と強く締め付けるロリ穴に、竿の先までを欲望に満たされていく。

その吐き出す先は一つしかない。強く押し付け、ゼロ距離での発射を目指すように、自分はその彼女の最奥での射精を待ち望んでいた。

愛を証明する手段が性交なのであれば、その究極は「孕ませる」ことにあるだろう。

言葉にせずとも、カーマもそれを理解した。

子宮に押し付けられたペニスの先端、密着させたその意図。その容赦ない腔奥への攻撃が目指す狙いは、ただの一つしか無かったのだ。

(ああ、これっ、しゅごいの来ちゃいます♡ 膣内出し、ナカ出し来るっ……♡ マスターさんの子種欲しいって準備出来ちゃってます……♡)

全身をビクビクと震わせ。

(いま射精されたら終わっちゃうっ♡ マスターさん専用おまんこサーヴァントになっちゃう♡ もう、ダメっ♡ これ堕ちるやつだ—— マスターさんの赤ちゃん、妊娠しちゃうっ……♡)

身も心も完全に平服し、カーマはただただその瞬間を待ちわびた。

自分も渾身の力で腰を加速させ、少女の身体を上から押し潰す。——その刹那。

——ブビュウウウウ!! ビュルルルル、ビュウウウウツツツ……!!

「ツ——んうう、あああアツツ……!! 出てる、出てますっ……♡ マスターさんのおちんぼ、膣内でびゅううって……♡ すごい、勢いでっ……射精してる……♡」

衝動は、膨大な量の精液として彼女の膣奥を震わせた。

吐き出し、注ぎ、満たされる。身動きの出来ないロリサーヴァントに一方的な膣内射精。流石のカーマも、これにはただただ圧倒されている様子だった。

「う……うう……サーヴァントだからって、出しすぎですっ……♡」

絶頂感に支配されながら、カーマはきつとした眼差しで見上げてくる。

「愛の神なのに……私が愛を与える側なのに……♡」

そんなうわ言のような呟きを何度も繰り返す。

そして、そのままくたっとベッドに倒れ込むのだった。

——マイルーム。

「うー、納得できません。許せませんっ」

低い獣のような唸り声を上げるカーマ。

自分の膝の上では、少女がそんな不満な様子を見せていた。

「大丈夫？ もう動けそう？」

「いえ、まだ動けません。おまんこジンジンしますし、ビリビリしています。それもこれもマスターさんのせいです。やめてって言っても聞いてくれないなんて……」

少女は不貞腐れて告げる。

確かに、それは悪いことをした。

しかしマスターとしてどうしても示さねばならない意地があったのだ。  
カーマには申し訳ないが、良い教訓にはなっただろう。よわよわなマスターでも、時には男を見せたくなる時があるのだ、と。

「う……そりゃあ私も少し調子に乗りすぎましたけど」

しかし、と続けて。

「だからって、アレはいくらなんでもやりすぎです！ 本当に壊れそうなくらい激しかったんですから！ それに——」

「……それに？」

不自然な間合い。

照れくさそうに顔を背けたカーマは、ぽつりとそう呟いた。

「わ、私を愛そうなんて人間……初めて見ました。本当にどうしようもなく愚かで、隙だらけで、バカなヒト。どうなっても知りませんからね？」

軽蔑するような視線を向けてくるカーマだったが、そこに嫌悪の様子は無い。あまりに理解しがたく、受け入れがたいが、素直な感情としては嬉しいのだと。

「責任、取ってくださいね？」

小さく小首を傾げたその要求に、優しく口づけを交わす。

彼女の分まで、自分が彼女のことを愛してみせよう……そう決めたのだ。

# 霊基No.17 アビゲイル・ウィリアムズ



## PROFILE

身長：152cm 体重：44kg

純真無垢で敬虔な少女。  
たまに「いけない子」になってしまうことも。

魔力供給回数：108回 絶頂回数：134回  
好きな体位：正常位 処女喪失日：召喚から16日目

妊娠確率：77%【危険日】

「背德的だわ……」と言いつつも「マスターが望まれるのでしたら……  
わ、私も頑張るわ！」と健気に子作りに励んでくれる。

## STATUS

絆LV 100 Next 0

性欲：B+	★★★★☆	知力：C	★★★★☆
体力：D	★★☆☆☆	母性：C	★★★★☆
従順：B	★★★★☆	反抗：D+	★★☆☆☆
淫乱：D	★★☆☆☆	感度：C	★★★★☆

「マスター、私のこと離さないで。  
このまま、ずっと……繋がってたいわ……」

# 霊基No.17 アビゲイル・ウィリアムズ



## SECRET GARDEN EX

### SG1：不良趣味

しっかり者である一方、普段は抑制していた「いけない一面」が爆発することがある。わるい言葉を使ったり、お酒を飲んだり、履いてなかったり……なかなか手が付けられない。

### SG2：自罰願望

元々の性格に加え、過去の罪による意識が彼女を自罰的に追い詰める。こういう時は少し厳しめに責めてあげると良い。お尻を叩かれるのも癖になっているようだ。

### SG3：二重人格

本来のアビゲイルと魔女としてのアビゲイル。どちらも「甘えん坊」なのは変わりなく、子どもらしく無邪気に愛を求めてくる。しっかり受け止めてあげるのが大切。

## WEAK POINT

### funny：★★★★☆

オナニーは「いけない」こと。ダメだと思いつつもやってしまう。たまにこっそりノーパンでマスターに会いに行ったり……その度に陰裂を濡らしているようだ。

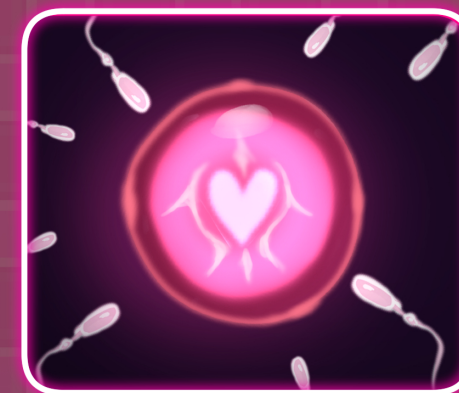
### clitoris：★★★★☆

クリトリスを指で強く摘まれると簡単にイってしまう。やりすぎると「マスターはイジワルな人だわ……」と涙目になるが、やめてほしいというわけではない。

### vagina：★★★★☆

ピッタリ閉じた綺麗なスジを開くと、甘い桜色の膜が広がる。膣穴もまだまだ小さく、肉体的にも精神的にも幼いことが窺える。

## LIVE



状態：♥♥♥

「いけない子」なアビーはわざと危険日に中出しセックスを求めて背徳感を楽しんでいる。お仕置きの意味も兼ねてたっぷりイかせてあげよう。

——マイルーム。

コンコン、という扉を叩く音。

時計を見れば、誰もが眠りに就こうとしている時間帯だった。

そんな夜も遅い時間に。奥ゆかしくも鳴らされたノックの音に、誰だろうという思いを巡らせながらも戸を開けた。

「夜分遅くにごめんさい、マスター。今……大丈夫？」

そこにいたのは、不安でいっぱいという表情をした——。

「アビゲイル……？ どうしたの、こんな時間に」

金髪碧眼の少女。左手にお気に入りの人形を抱きかかえた、サーヴァントの一人。アビ

ゲイル・ウィリアムズ。

マイルームを尋ねてきたその子の名を、驚き半分に呼んでみる。その女の子——アビゲイルはと言うと、俺の顔を見るなりホツとしたように息を吐き、若干滲んでいた目元の涙を拭ってそう言った。

「マスターは……今からおやすみの時間？ 起こしちゃったのなら、その……ごめんなさい」

「いや、大丈夫だよ。少し雑用が残ってて今から寝るところだし……それで、どうしたの？」

あくまで気を遣わず、アビゲイルの心配を解いた上で訊いてみる。

心の優しい、年齢の割にしっかりとした彼女のことだ。申し訳なく思わせるのは忍びない。だから遠慮せずに言ってくれと、そうした姿勢で向き合おうと、アビゲイルは恥ずかしそうに顔を伏せて呟いた。

「……笑わないで聞いてほしいわ。マスターも……あるでしょう？ むかし聞いた怖いお

話を思い出して、眠れなくなっちゃったり……」

「まあ、無いわけではないけど……もしかして」

「その……今日はマスターと一緒にお布団で寝かせてほしいの。こういう時、いつもはティ  
テュバが付き添ってくれてただけど……ダメ、かしら？ やっぱり迷惑よね……」

若干、拍子抜けというか——。

深刻そうな顔をするものだからどんな悩みかと身構えたが、アビゲイルのそれは実に子供らしいお願いで、そんなことかと納得した。

しかし、問題が。このアビゲイルという少女。年頃に無邪気なため、疑うという事を知らない。子供とはいえ、女の子だ。男女が一緒に布団で寝る事への抵抗等々は無いのだろうか。

「私、迷惑はかけないわ。うるさくしないし……おねしょも、しないし」

「……………」

無いのだろう。その警戒心の無さが心配になってくるが、ここで追い返すというのも酷な話だ。なに、俺が間違いを犯さなければ良いだけである。簡単な話だ。うん。

「—————本当!？」

「ああ、うん。アビゲイルさえ良ければ泊っていきなよ」

「ありがとう、マスター! えへへ、こんな無茶なお願いを聞いてくれるなんて、やっぱりマスターは良い人だわ! ええ!」

彼女の申し出を快く受け入れると、途端、これまでの不安そうな顔が嘘だったように、アビゲイルは無邪気にも喜んだ。

マスターとして、それくらいお安いごようである。俺で良ければ、存分に頼ってほしい。

「それじゃあ……!!」

「うん、遠慮しないで」

「し、失礼します……!! ……わあ、ここがマスターの……男の人のお部屋、なのね……」

別段、これといった特徴の無い部屋だとは思うが、少女にとっては新鮮さがあつたらしく、アビゲイルが目をキラキラと輝かせて入ってくる。

そうやって興味深く観察されるのは恥ずかしい気がしなくてもないが——まあ、普段からプライバシーなんて有って無いようなもの。今更恥ずかしがっていても仕方がないだろう。

「マスター、マスター!」

「ん?」

見ると、アビゲイルが早く早くと言った様子でこちらを呼んでいた。

ベッドの上で楽しそうな笑顔を見せる少女。

ポンポンとシーツを叩き、早く来てといった感じに。

しっかりしているとは言っても、こういう所はまだ外見相応か。不安そうだった様子も何処へやら。待たせても申し訳ないので、すぐにでも向かうとしよう。

「……なんだかドキドキするわ。マスターとこんなに近く……マスターは、その……緊張はしていないのかしら？」

後ろから抱きしめるような体勢。腕の中に収まったアビゲイルが、静かに訊いてくる。

「してない……って言ったら嘘になるかな？」

「ふふふ、良かった。私だけ緊張してる、なんて……なんだか悔しいもの」

俺がそう言うのと、アビゲイルは嬉しそうに鼻を鳴らした。

こうして密着し合うと、お互いの体温が存分に伝わってくる。アビゲイルの身体は見かけ通り繊細な造りをしていて、触れるのも慎重になるほどの儂さがあったが、

「もっとギュッとして、マスター」

「い、こう？」

「ええ。苦しいくらいでちょうどいいわ」

流石に強く抱きしめすぎたか——と。

不安に躊躇したのも刹那。少女に苦悶の表情は見られない。

「私、マスターが側にいてくれないとダメだわ。マスターにちゃんと見てもらってないと……いけない子になっちゃいそう。時々、自分が怖くなるの。一人でいると……特に」

「……………」

「あんまり遠くへ行かないでね、マスター。あなたが居ないと……わたし」

ぼつりぼつりと不安を吐き零していくアビゲイル。

彼女というサーヴァントは少し特殊だ。その特殊さが孤独……寂しさのような感情を覚えさせているのかもしれない。『フォーリナー』としての。外なる宇宙と通じた者としての。だとすれば、マスターとして俺がしてやれる事は一つ。

「アビゲイルは意外と甘えん坊だな」

「……私、まだ子供だもん。甘えてもいいでしょう？　こんな事……マスターにしか頼めないし」

頬を膨らませ、恥ずかしそうに不貞腐れるアビゲイル。

そう、彼女はまだ子供だ。あどけない女の子なのだ。

だからマスターとして好きただけ頼ってほしいし、泣きたくなくなったら胸を貸す、悪さをし

そうになったら叱ってやる。それは他ならぬマスター、自分にしかできない事だろう。我儘の一つや二つ、喜んで叶えてやるものだ。

「ありがとう、マスター。私、貴方と出会えて……このカルデアに来て、本当に良かったわ！ 他の人も私と同じ年頃の女の子ばかりだし、すぐに友達になれた。これも貴方が私を怖がらないでいてくれたおかげよ」

「どういたしまして。アビゲイルが楽しそうにしてると俺も嬉しいよ」

「……それでね？ マスター。一つ、お願い……いえ、我儘があるのだけれど」

アビゲイルがこれまで以上に恥ずかしくて目を伏せるには。

「私のこと……よ、よければ、アビー、って呼んでくださいな。……二人きりの時だけでも」

「え……?」

虚を突いてきたお願い……我儘に、少しばかり動揺した。

そんな事で良いのだろうか。あまりに些細すぎる、しかし大胆でもあった要求に、困惑を隠せないでいる。だがまあ、聞き直すのも野暮だ。彼女の言う通り、二人きりの時だけでも呼び方を変えてみるとしよう。

「えっと……それじゃあ……アビー」

「！ ええ、ええ。なにかしら、なにかしら！」

表面的には呼び方を変えただけ。

それだけのはずが、アビゲイルはとても嬉しそうに顔を向けてくる。

（っ……改めると、なんだか恥ずかしいな。それに真っ直ぐ見つめられると——）

「ふふっ、マスターってば照れてるのね！ そんなに恥ずかしがらなくてもいいのよ！」

そうは言っても、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

それに……先程からアビゲイルの視線がどことなく熱を帯びているような。そわそわと身体を震わせる少女の瞳は、何かを窺っている、そんな高揚が見え隠れしている。

「えっと……どうしたの？」

「マスターは……私が悩んでいる時も、寂しい時も、いつも助けてくださった。だからね、私からも……マスターにお返ししたいわ。マスターは私みたいな子供……好みではないのだけれど……それでも、私っ……!!！」

その時だった。

少女が勢いよく腰を浮かせた、その瞬間だった。

「んっ………♡」

「ッ」

視界が白黒と明滅する。その中でハッキリと見えたのは、少女の、アビゲイルの唇が飛び込んでくる一瞬の光景だった。

それと同時に、唇を通して柔らかい感触と熱が伝わってくる。仮に目の前が真っ暗でも何をされたかだけは理解しただろう。それほどにストレートな接触を受けていた。

「っ、ぶはっ……！　ア、アビー……！？　いきなり何を…………！！」

「……マスターには、ちゃんと私の気持ち……知っておいてほしいの」

そう言って、アビゲイルが静かに寄りかかってくる。

今も己の心臓は、少女との口づけにより凄まじい勢いで鼓動を刻み、それは目の前の彼女も同じなのだろう、頬を赤く染めた少女は、切なげな瞳でこちらを見つめていた。

「……あのな……俺も男だし、こういう事をされると——」

色々とマズい事が起こる、そう告げた。

その行為が持つ情熱的な意味を理解しているだけに、目の前の少女を意識せずにはいられない。いや、意識しなければならぬ状況にある事を理解する。

「私は、気にしないわ。マスターになら、何をされても……」

「……………」

愛らしく微笑んだ少女の笑顔に、あらゆる壁が音を立てて崩れていくのを自覚した。理性は風に消え、ただ少女の為すがままを受け入れるようになる——。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「んっ……見てくださいいな、マスター。恥ずかしいけど……私の……変ではないかしら……？」

肅々と、けれど、大胆に。

今、自分の目の前には、下着を脱ぎ去り、服をたくし上げる形で下半身を露出している少女が……アビゲイルが立っている。自分はベッドに腰かけているため、ちょうど視線がそこと向き合うような……直視はできない、だけど目を逸らせない……そんな状況に追い込まれていた。

(確か……アビゲイルって12歳ぐらいって聞いていたような……)

自分の目の前にあるもの。それは、少女の陰部だった。

大人のものとは当然に違う。いまだあどけなさの残る、男を受け入れる準備の到底整っていないだろう膣穴に他ならない。

間近にあるということは、詳細に見えてしまうという事だ。

アビゲイルの少女としての部分。

服をたくし上げるといふ行為によって増した禁忌性。

ひくひくと肉を震わし、涎を垂らしている。そんな禁断の領域を、あろうことにアビゲイルは広げてみせていた。

「……やっぱりやめた方が……」

「だ、大丈夫っ……！ 私だって、マスターと……これくらいっ……！」

あまりに子供な部分を見てしまっただけに、一抹の不安のような感情が過ってしまふ。だが、アビゲイルの意思は変わらない。少女はその桜色の領域を広げたまま、ゆっくりと腰を下げていき、彼女の股下にあるもの……理性とは裏腹に大きくなってしまっていた自分の肉棒に向かって進んでいた。

(あ、あれがマスターの……お、おちんちん、さん……♡ ここからでも分かるくらい、すごく大きくなってるわ。ちゃんと……入るかしら……?)

足元でそそり立つ陰茎を見つめ、少しばかり怖気付くアビゲイル。

やはり子供だ。どうしても、入るかどうかという疑念が付きまとう。

「んあ……くっついちゃった……♡ マスターと、私の……♡」

「っ……アビー……！」

「今、入れるわ……マスターの、おちんちんさん……♡ ん、んんっ、あっ……♡」

亀頭の先端が、少女の柔らかい肉の部分と繋がり合う。

それだけではち切れんばかりの興奮が溢れてきたが、アビゲイルはそこから更に腰を下げていく。自分の膣穴にそれを沈み込ませるようにして。

腰上に、少女が勢いよく座り込んだその一瞬――。

「んっ、あああっ……！！ はっ、ああ、あああああっ……！！」

堂々たる姿勢で直立していた十数センチの代物。少女の恥部を目の当たりにし、不覚に

も完全なる勃起を遂げていた己の肉棒は、アビゲイルが深く腰を下げ降ろした一瞬で、その姿を確かに消していた。

当のアビゲイルはと言うと、肉棒を己が雌穴で完全に啜え込んだ瞬間、痺れたように動かなくなっていた。こちらに跨り、寄りかかった状態でふるふるすると身体を泣かせている。

——えーと、大丈夫……？

「……………痛いわ、マスター……こんなに痛かったなんて……ぐすっ」

「言わんこっちゃない……」

俺がそう尋ねると、アビゲイルは涙を滲ませて震えていた。

まあ初めては相当だと聞くし、ましてやその年齢では、こうなるのも必然と言うか何と  
いうか……仕方ない。まだ動くのは無理そうだし、ここは時間を掛けて慣らしていくとし  
よう。

「アビー、口開けて」

「んっ…………ちゅ、むっ…………れるっ、んちゅう、れろっ…………♡ ちゅう、んじゆる、あむ、んぢゅう、ちゅっ…………♡ はぷっ…………ん、あっ…………ますたー…………♡」

ペニスを膣内に挿入したまま、アビゲイルと口づけを交わす。

こちらが呼ぶと、少女も素直に従い舌を出す。

そして、そのまま口内に舌を挿入。下が無理なら、上から責めるしかない。互いに舌を絡め合い、一心不乱にキスを始めた。

「んああ、ますたあ…………んちゅ、じゅふう…………♡ んひゅ、あっ、んんっ…………んぢゅ、ずる、ちゅううう、れろっ、える、ちゅろっ…………♡」

まるで挿入の痛みを忘れるかのような必死さだ。

半ば呼吸も忘れて、アビゲイルと何度も唾液を交換する。

しがみ付くかの如くに腕を回し、強く縋り付くアビゲイル。

慣れていない、どころか初めてだろうその行為に夢中となり、一心不乱に舌を働かせる

64 少女の健気な姿に興奮を隠せない。この上なく可愛らしく、そして淫靡だと思う。

「上も脱ごっか」

「っ、ええ……………これでいい、マスター……………？」

俺からの要求を受け入れ、アビゲイルがいそいそと服を脱ぎ始める。

「うう……………マスターに、胸、見られちゃってるわ……………」

「なにを今更。アビーのおっぱい、小さくて可愛いよ」

「こ、これから大きくなるわ……………これから……………きつと……………ええ、きつと……………！」

恥ずかしそうに胸を隠すアビゲイル。だが、その腕を取り払い、少女の胸元に浮かぶ二つの突起……………綺麗なピンク色をした小粒への愛撫を開始した。

「ひゃ、ああっ……ます、たっ……♡　そこ、ビリビリって……触っちゃ、ダメえ……♡  
 ダメだったらあ……んん、はあんっ……やっ、ああっ……♡」

左手は膨らみ全体を、右手は先っぽを執拗に。胸への強引な愛撫に、アビゲイルが悲鳴のような声を鳴き零す。だが、何処となく艶のある、気持ちの良い声だった。

決して「有る」とは言えない程度の盛り上がり。年齢を考慮すれば妥当なサイズか。けれど、それでも柔らかさの存在する……起立した二つの頂、その程よい硬さと相まって、両手に飽きぬ面白さを与えてくれる。

「ふあっ……マスター……そんなに、弄らないでっ……♡　そこ、弱いからあ……ひゃうっ♡」

「……！」

すると、刺激が強すぎたのか、愛撫の手から逃れるようにしてアビゲイルが抱き着いて

きた。

胸を押し付け、無我夢中と言った具合に。しかし、それは逆効果だ。ちようど目の前にそれを持ってこられては、自分としてもそうせずにはいられない。

「きゃあっ……♡　ますたっ……舐めちゃ、ダメっ……そこ、赤ちゃんみたいに……ちゅーつて、しないでえ……♡　ん、やあ、はっ……あっ、んあっ、ああんっ……♡」

鼻先に押し付けられた少女の乳首を、それこそ赤子のように、音を立てて口淫する。指から舌に変わったとてやることは変わらない。口内でその硬さを遊び、慎ましやかなアビゲイルのおっぱいに、快楽という未知の感覚を教えるのだ。

「……どうかな。そろそろ、痛くなくなってきた？」

「ふえ？　……えっと……うん、最初の時よりは痛くない……マスターがいっぱいしてくれたおかげで……変な感じはするけど、大丈夫そう……」

どれくらいの間を愛撫に費やしただろうか。気が付くと、アビゲイルの表情にも緊張が解け、程よくリラックスした状態にある事が見て取れた。

今も肉棒は彼女の膣内に収まり、内部から圧迫しているだろうが……最初ほどの窮屈さは無いと少女は言う。十分に時間は掛けたのだ。もしかしなくとも、今ならば行けるだろうか。

「今更だけど……本当に俺で良いのか？」

少女をベッドに寝かせ、正常位の体勢に持ち込んだ状態でそれを問う。

本当に今更だ。だが、もしも……この先に少しでも不安、後悔が付きまとうのであれば、言ってほしい。そこはマスターとしてアビゲイルのしたいようにする、と――。

「……マスターがいいわ。マスターじゃなきゃ、こんな事お願いしないもの……っ」

涙を浮かべて、そう告白してくれた。

であれば、もはや言葉はいらないだろう。

「それじゃあ、いくよ……」

「うん……マスターのこと、もっともっと感じさせて……♡」

寝かせた少女に覆いかぶさるようにして。

「っ、んんっ……ますたーの、おちんちんさんが、腔<sup>な</sup>内<sup>か</sup>で——ん、はあ、ああああっ♡」

今まで我慢してきた衝動を一斉に開放。少女の小さな腔穴で、一気にそれを爆発させた。

「やっ♡ あっ♡ はっ♡ ます、たっ……ますたー……♡」

ついに動き始めた肉棒の威力に、アビゲイルが口を半開きにして悶え出す。けれど、それは苦しさというより、形容しがたい刺激に困っているだけのようでもあった。

自分も、腰を前後に激しく振るい、ペニスを幾度となく挿挿する。見た目通り小さく狭

いアビゲイルの膣内は、肉棒に凄まじい快楽を与えてくるが……自分が気持ち良くなるためというよりは寧ろ、彼女にもっとその感覚をしまってほしい、その一心で腰を振っていたと思う。

「ん、はあ……ますたーのが、私の膣内で暴れてっ……♡ これ、すごいっ……こんなの、知らないっ……♡ はっ、はあっ……マスター……♡ もっと……もっとしてえ……んんっ♡」

幼い身体で、アビゲイルは懸命に快楽を求めてくれている。

その姿に興奮し、肉棒を進めるストロークも徐々に加速を遂げていった。

バチンバチンと肉を打ち付け合い、少女の膣内を己のものとするべく攪拌。徐々に解れていった膣ヒダの感触が、そのまま本人の蕩けた様子を表すかのように。

奥を突く。少女の弱点を穿つかの如く。ただひたすらに最奥を目指して動かした。

すると――。

「は、ああっ、だめ、っ……きちゃう、なにか、くるっ……ますたー、ますたーっ……♡」

一転。虚ろだった様子から突然、何かに怯えたようにしてアビゲイルが震え出す。

身体を萎縮させ、こちらに救いを求めるような眼差しの少女は、それが何であるかを知らない。じつくり時間を掛けて愛撫をした事が影響したのだろう。意外と早く訪れたそれは、少女をひとときわ高い嬌声で叫ばせる。

「くっ、うう……ン、あああああああつ………♡」

びくっ、びくんっ。

アビゲイルが大きく鳴いた刹那、肉棒をこれまで以上の締め付けが襲った。

おそらくは初めての感覚だったろう。全身を奔る大きな衝撃に、少女の身体が幾度となく痙攣する。息を切らし、虚ろな瞳で——これは、もしかしなくともイッたのだろう

——恍惚とした様子を覗かせるアビゲイルは、ワケが分からないといった風に俺を見上げてくる。

「はあ……はあ……イッ、た……？　これが……イク、って感覚なの……？」

俺が教えると、アビゲイルは反芻するように。

「私……マスターと一つに繋がれたのね……♡ 今でも信じられないけど、あんなに大きなものが……私の膣内に入っちゃうなんて……♡」

アビゲイルの視線は、今も俺の肉棒を咥え込んでいる、自身の膣穴に向けられる。

子供同然の、綺麗な縦スジを広げた、真正正銘のロリ穴。それがいやらしくも男のものを咥えているとあっては、信じてたく感じるのも当然か。

ああ、そんな彼女を見ていると――。

紳士たらんと決めていた覚悟が遠のいていく。

彼女のことを獣のように求めたくなってしまう。

「ぎゃあっ……！ マ、マスター……急に、いきなり……ダメっ、ダメだったらっ……！  
まだ身体が痺れていて……今そんな事されると私っ――ひゃうううううんっ♡」

すっかり脱力していたアビゲイルは、その唐突なる一撃に驚き混じりの嬌声を泣き叫んだ。

後ろから襲う、獣の交尾の如き体勢。絶頂の波が収まらぬ中、再開となる一突きを膣奥にぶつける。休みなく申し訳ないが、どうにも耐えられない。さながら狂気とも呼ぶべき衝動が自分を動かしていた。

「んあっ、いやっ、はっ……これ、すごいっ……♡ お腹の奥が、ズンズンって……んっ、あんっ、ダメなのになっ……マスターの、バカあ……おかしくなっちゃおう……♡ んくっ、はあぁっ……♡」

すまない、と謝罪する。初めてなのにこんな無理を強いて。

だが、言葉とは裏腹に身体は止まることをしない。○学生にしか見えないアビゲイルのお尻に腰を何度も押し付け、少女の浅い最奥を激しく突き穿つ。何度も。そう、何度もだ。

「ん、ふう——あっ、くっ……♡ マスター、マスターっ……♡」

幼女には大きすぎる刺激を与えてしまったためか。最初は悲鳴交じりに抵抗を叫んでいたアビゲイルだが、次第にそれを受け入れるようになってくる。

「こんなにされたら、私っ……イケナイ子に、なっちゃうっ……♡ エッチなことなのに、まだ子供なのにつ、ああっ、んあ……マスターのおちんちんさんで、気持ち良くなっちゃうっ……♡」

それなら安心してほしい。俺はどんな姿のアビゲイルも好きだ。祈りを欠かさぬ普段の彼女も。必死に俺を求めてくれる今の彼女も。『銀の鍵』である彼女も。

全部。全部、気に入っている。だから遠慮なく気持ち良くなってほしい。いつまでも側にいるから、心配せずにイってほしい。

「マスターっ……♡ ん、ひあっ、あんっ……また、イッちゃうっ……♡ 気持ち良いのが、お腹に集まってっ……いあ、いあっ……しゅごいの、来ちゃううう……♡」

自分が自分でなくなることへの不安が和らいだためか、途端、どこかセーブのかかって

いたアビゲイルの身体も、二度目の絶頂に向けて緊張が高まっていく。

「っ……アビー、俺も……俺も、イクっ……！」

「あっ、はっ……マス、ターっ……♡ 一緒っ……一緒が良いっ……♡ マスターと一緒にイクたいっ……んあ、い、あっ——ます、ひゃあっ……ますたあ、ますたあっ……♡」

何度も俺を呼び、俺を求めてくれるその少女が、たまらなく愛おしい。

ああ、限界だ。元より限界に近かったが、歯止めを壊された事で一気に加速する。

込み上げていた熱い塊。全てを出したいという欲望。それをアビゲイルは、幼い身体一つで受け入れようとしてくれている。だから一番奥深くへと、思いっきり腰を突き出して

「くっ……イクッ……！！ 射精る、射精すぞッ……！！」

「だして、マスターっ……♡ アビーの膣内になっ……ぜんぶ、ぜんぶっ……マスターの熱い

の、ぜんぶ、だしてえええええつ………♡」

白く熱い衝撃が、肉棒を勢いよく駆け抜ける。——瞬間。

——びゆるるるっ！　びゅびゅつ、びゅびゅうううう！！

「い、っ……あああああああああつ——！！——あつ、あーっ……ますたーの……あつ  
 いのが……膣内で、たくさんっ……んっ、くう——おちんちんの先っぽから、びゅー  
 びゅーって、出てるの……これ、好き……マスターを、いっぱい感じられるわ……♡」

一番奥。赤ちゃんの小部屋。子宮。

膨大な量の精液が、その一室を満たさんとして注がれる。

齢12歳のロリサーヴァントに。幼女同然のサーヴァントに、膣内射精。その背徳的な  
 事実を実感して、強すぎる快感に脱力する身体とは裏腹に、射精はまだまだ収まる気配を  
 見せはしない。

「あつ、ふう……ますたーの……お腹にいっぱい……♡」

ドクドクと、精液が放出される。アビゲイルはゆっくりと体勢を変え、俺と向き合うように座り直すと、性器と性器の結合部——収まりきらなかった白濁の溢れるそこを指で掬い、

「んっ……マスターの、味……♡ マスターの……精子……♡」

赤子のように指を咥え、くちゅくちゅと音を鳴らして嚙下する。

ただそれだけで。その様子を見ているだけで、力を失っていた自身の勃起が、見る見るうちに威勢を取り戻していくのが分かった。ああ、それは卑怯すぎるよアビゲイル。

「きゃあつ！ マ、マスター……!?!」

再びベッドに押し倒され、アビゲイルが目を白黒させて動揺する。

流石に次は無いと油断していたか。だが、侮ってもらっては困る。マスターたるもの、こ

の程度で満足は出来ぬと知れ。

「ダメえ、ダメだったらっ——！！　これ以上は本当に無理だからっ——！！！」

精一杯の抵抗を見せるアビゲイル。

健闘も空しく。

結局、眠りについたらのは、二人の体力が尽き果てた朝方になってからだだった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「んっ……」

よく寝た、と直感で理解する目覚めだった。

時間は……なるほど、もう昼が近い。十分に寝たと感じるわけだ。

「すうー……ん、う……ますたー………」

「！」

と、そこで。可愛らしく寢息を立てている少女の存在に気が付いた。

同じ布団を共有し、無防備な寝顔を晒すその少女は、いと幸せそうな様子で熟睡している。そう言えば——虚ろな思考を呼び覚まし、思い出す。

(アビゲイルが泊まりに来てたんだっけ……それにしても——)

一晚を過ごしたという事実。それを少々恥ずかしく思いながらも。

(可愛い……触りたい……)

無防備な寝顔を見て、つい、欲望が込み上げてくる。

「ん、んう……………」

(柔らかい……)

頬を指で突き、その弾力に驚愕した。

ぷにぷにと音のなるような。男のものでも、大人のものでもない。少女特有の弾力。こんな頬が存在しているのかと、病みつきになる手触りだった。

「ほーら、アビゲイルー」

そのまま移動して、指を少女の唇の近くを持っていくと。

「ん…………ちゅ、ぷ…………あむ、くちゅ…………」

(なにこれ、めっちゃ可愛いつ……)

無意識のままに、アビゲイルが俺の指を咥えてくれた。あどけない子供というか、仕草の一つ一つが可愛すぎてたまらない。

「ん、あっ……ます、たあ……？」

「あ、ごめん。もしかしくなくても、起こしちゃった？」

そうこうしている内に、アビゲイルが重そうに瞼を持ち上げた。

いまだ夢の中にあるような心地で周りを見渡し、やがて状況を理解したのか、少女が思い出したように頬を赤らめる。

「そ、そうだったわ。私、昨日はマスターのお部屋で……マスターと……」

「……えーと、おはようアビー」

「!!! おおおおはようございます、マスター! き、気持ちの良い朝ね!」

もう昼だけど——そう言うと、信じがたい様子で少女が時計を確認する。

「……本当だわ。こんな時間まで眠っていたなんて……それにマスターより後に起きちゃうなんて、だらしがないわ。私、サーヴァントなのに……ごめんなさい、マスター」

「いや、気にしないでよ。昨日はだいぶ激しくしちゃったわけだし……疲れて熟睡しちゃうのは当然というか——」

「あ、う……そう、よね。あんなに激しくされちゃったんだもの。疲れるのは当然だわ……」

顔を真っ赤に染め、恥ずかしがるアビゲイル。

こちらこそ、小さい身体に無理をさせすぎたと謝罪する。

だが、そのおかげで彼女の色んな姿を見ることが出来た。彼女が恥ずかしいと思うような姿も含めて、それはもう色んな姿のアビゲイルをだ。

「うう……マスターが意地悪で変態さんだわ。こうなったらマッシュさんに言いつけなきゃ……！」

「ちよっ……それはマズい、それはマズいっ！」

「……ふふふ、冗談だってばもう。マスターは意地悪な人だけど、最高のマスターよ。貴方と一緒に私、魔女って呼ばれても……うん、平気だわ。だって、貴方が側にいてくれるもの」

嬉しそうに表情を緩ませて、アビゲイルが俺の手を握ってくる。

カルデアに来た当初の彼女は、疎外感からか不安な顔ばかりを見せていたが――。

「さ、さ。行きましょう、マスター！ わたし、お腹が空いちやっただ！ 朝食……じゃなくって。昼食にしましょう、マスター！」

ぐいぐいと俺の手を引っ張り、食堂へと誘うアビゲイル。

「マスターは何が食べたいかしら？」

「そうだな……パンケーキとかはどう？ たしか大好きだったよね？」

「ええ、ええ！ よくぞ選んでくれました！ わたし、大好きなの！」

その幸せそうな顔を見ると、自分としても満足な気持ちになってくる。さて、この笑顔を絶やさぬためにも、マスターである自分が側に居続けよう。それがいい。

# 靈基No.18 茨木童子



## PROFILE

身長：147cm      体重：50kg

大江山の鬼。平安を生きた鬼の頭目、その一人。  
酒呑には基本的に逆らえない。

魔力供給回数：76回      絶頂回数：88回  
好きな体位：正常位      処女喪失日：召喚から49日目

妊娠確率：39%【安全日】

「わ、吾は鬼だぞ。汝は人で……い、嫌と言ってるわけでは……！  
ええい、好きにしまえ！」

## STATUS

絆LV 100      ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥  
Next 0

性欲：E	☆☆☆☆☆	知力：C	☆☆☆☆☆
体力：B	☆☆☆☆☆	母性：B	☆☆☆☆☆
従順：D	☆☆☆☆☆	反抗：B	☆☆☆☆☆
淫乱：E	☆☆☆☆☆	感度：D	☆☆☆☆☆

「汝はつくづく数寄者よな。この見窄らしい体のどこに……  
え、綺麗だと？ ば、ばかもの……っ」

# 霊基No.18 茨木童子



## SECRET GARDEN EX

### SG1：甘党

甘いものが大好き。  
お菓子をあげると割となんでも言うことを聞く。ちょろい。

### SG2：へたれ体質

律儀で真面目で、酒吞童子には頭が上がらない。なのでよく彼女のパワハラに付き合わされる。いざ魔力供給を行おうとしても必ずとっていいほど怖気付いてしまう。

### SG3：百鬼夜行

鬼を率いる者として強い責任感を持っている。それが「鬼らしく」は無いとしつつも、茨木は彼らの統率者であらんとする。将来的には自らが率先して一族を増やさなくてはとも考えて……

## WEAK POINT

### head : ★★☆☆☆

頭を撫でると「童のように扱うでない！」と怒る。けど満更ではないのか振り払おうとはしない。

### mouth : ★★☆☆☆

決して性行為に積極的ではないものの、マスターにできるだけ喜んでもらいたく夜伽のスキルも習得中。不慣れな感じですがフェラチオがたまらなく愛おしい。

### vagina : ★★☆☆☆

真面目で勤勉な彼女は同胞を増やすべく「出すなら膣内に出せ」と積極的に膣内射精を要求してくる。そしてその度に絶頂を繰り返すのだ。

## LIVE



状態：♥♥♥

子作りはあくまで一族を繁栄させるための手段だと割り切る彼女だが、個人的に実は密かに喜んでる。

「ふははアー！ えんま帳、奪い取ったりー！！」

「か、返すでちー！」

廊下の奥から聞こえてくる、少女たちの喧騒。

一人は満足気に、もう一人は困ったように。

見過ごすワケにもいかないのです、こちらへ向かって走ってくる先頭の少女の——頭部に特徴的な二本の『角』を生やした彼女から、それを奪い取る。

「ぬああ！？ き、貴様……何をする！ 返せ、返さぬかッ！」

「……他人のモノ盗んじやダメってアレほど言ったでしょ、茨木。紅ちゃん困ってるよ」

一冊の手帳らしきそれを取られた瞬間、少女が声を張り上げて抵抗した。

古風な衣装に身を包んだ『鬼』の一体。パーサーカーのサーヴァント・茨木童子。

こうやって彼女を叱るのも慣れたもので、半ば習慣じみた感覚で少女を見る。その奥で

は追いついたもう一人の少女・紅閻魔がホッと胸を撫でおろしていた。

「はいこれ」

「あ、ありがとうございます……主人……！」

「それにしても……手帳レシビなんて奪ってどうしたいのさ？ 料理でも始める気？」

「ふんっ、汝には関係なからう。鬼とは悪逆の徒。吾は盗賊の首魁なれば。その紅鬼めが大事にしておったのでな、宝と見れば、奪いたくなるのが鬼の本能さぞ」

小さい胸をうんと張り、自慢げに茨木は話す。

そう、彼女は『鬼』と呼ばれる魔族の一人。平安時代、都で暴虐の限りを尽くし、民衆に恐怖の象徴として刻まれた百鬼夜行の頭領に他ならない。の、だが――。

律儀で臆病で実は真面目な性格のせいか、あまり威厳というモノを感じられないのも事実。こうして悪事いたずらを働くのも、鬼らしく在りたいという彼女の切実な願いによるものなの

だろう。

(健気だなあ、ホント……)

「む……なぜ吾を生易しい目で見る？ ええい、こそばゆいから止めぬか！」

茨木が照れくさそうに吐き捨てる。

ともかく、悪事は悪事だ。朝食の準備で忙しい紅閻魔に、モノを盗むという大変な迷惑を掛けたのだ。ちゃんと謝っていたどころ。

「ハッ、貴様みたいな人間に指図など受けるものか！」

(まあそう来るよね……)

半ば想像できていた返答に、肩を落として落胆。——ああ、そんな時。

「……だが、そんな紅鬼めが作る朝餉は大層美味であると聞く。酒呑もいたく気に入っていた。それを邪魔したとあつては……うむ、酒呑に殺されかねん。だから素直に詫びをくれてやる。……悪かったな、赦せ」

その瞬間、自分も紅閻魔も、目を合わせて驚愕を向け合った。

まさかという思いである。茨木の性格上、素直に頭を下げるとは思っていなかっただけに、一体なにがあつたというのか。

「な、なんでもないわ、たわけッ！ それに気安く声を掛けすぎだ！ 吾は鬼、汝は人、その立場をゆめ損なうでない！ 吾は貴様のことなど、何とも思っておらぬからな！」

そう言って、少女はしっぽを巻いたように走り去っていった。

彼女の変容……というか違和感のある態度が気にならないワケではない。

だが、問いただそうにも茨木の姿は彼方に消え、途方に暮れた自分と紅閻魔は呆然と立ち尽くすのだった。

∞  
∞  
∞  
∞  
∞  
∞

——廊下。

「くう……あの人間め……!!」

様子がおかしい。そう気づいたのは、果たして何時からだったか。

思い出すのは、自分の有り得ざる言動、そしてこの胸に渦巻く不思議な感覚だった。

大江山の鬼たちの頭領であった自分が——。

奪い、従え、荒ぶる存在である自分が、ただの人間に叛意を示せずにいる。その奇妙と  
いか気味の悪い感覚に、茨木は理解しがたくも苦しんでいた。

「ちょお待ちや、茨木」

「のわあ!?! しゅ、酒吞……!?!? 急に声を掛けなくてくれ、驚くではないか!」

廊下を逃げるように走っていた茨木を、急に一人の少女が呼び止めた。

黒髪和装の、人形の如き精緻な童女。自身同様、二本の異形<sup>の</sup>を備えた彼女の存在をして、茨木は酒吞——酒吞童子と彼女を呼んだ。

同胞にして戦友、無二の友人でもある少女の出現に、茨木は驚きながらもそれを受け止める。

して、何用か。声にならない少女の眼差しは、酒吞に対してそう訴えているようだった。酒吞は「大した用やあらへんけどな」と前置きし、少し間を空けて語り出す。

「いや、な? さっき、茨木が旦那はんと話しとるとこ、見とったんやけど——」

「ツ……見ていたのか酒吞!?!」

「せや。それでな、なんや茨木の様子がおかしゅう見えたんよ。前はあない殊勝な子おやなかったやないの。せやから、どないしたんやろ……って」

相変わらず自儘な口調で語る酒吞。

彼女の指摘に、苦虫を噛み潰したように茨木は顔を伏せた。

そう、自分とて気づいてはいる。

大江山の鬼の首魁。異形たちの頭領。そんな誰もが恐れ・平伏すはずの自分が、ただの人間の魔術師に、聞き分けの良い態度を取ってしまったている現実。

無論、サーヴァントとマスターの在り方は理解している。その関係性を気まぐれに面白と感じ、表面上は付き従っているのも事実だ。

——否、そうではない。これはもっと別の感情だった。

鬼らしくあれという母親の教え。その言葉に忠実に従い生きてきた生涯。

暴力と篡奪、破壊と悪逆。酒吞のように自分の考えに従ったものではなかったが、それでも鬼らしい生き方が出来ていたと思う。なのに——。

「……なあ酒吞、吾は気でも触れているのだろうか。こんな経験、初めてゆえな」

茨木の呟きは助けを請うかのようだった。

ゆえに酒呑も親身になって考えてみるが……なんてことはない、実に簡単な答えである。

(茨木があゝの鬼ニにちよっかい掛けよんのは、まあ同じ生まれの者モノに会えたんが嬉しいからやろうけど……旦那はんは違うわなあ)

酒呑は考える。

鬼と人。そもそも種族として異なる相手を、鬼が気に掛けるなど有りはしない。

奪われたのなら、奪い返せばいい。命じられたのなら、背けばいい。——それが出来ない。難しい。心がモヤモヤする。となれば、少女にとっての答えは一つだった。

「……ふふ、なあんも心配あらへんよ茨木？ そら普通のことやさかい」

微笑ましく笑う酒呑の発言に、茨木もホッと安堵を零す。

だが、問題は「それ」が何であるかだ。

茨木は急かすような態度を酒呑に向ける。それに対し、酒呑も愉快そうに笑った。いまだ正体を掴めていない少女に対して、簡単極まりない答えを告げる。

「それな——旦那はんのこと……好きなんとちゃうの？」

「……………は？」

明快に、簡潔に、容赦なく告げられた解答に、茨木は沈黙した。

よく意味が分からない……というか頭に入っていない。好き——誰が、誰のことを自分が。誰を。まさかとは思うが——ああ、それは。

「ツ——ななな、なにを言っておるのか酒吞！？ わ……吾が、あの人間めを、す……好いて、いるだど……！？ ふ、ふざけたことを言うでない！ 吾は鬼で、奴は人だぞ！

そのような戯言、如何に酒吞と言えど——！」

「ふざけたつもりなんてあらへん、うちかて茨木のことと思て言うてんのよ。だってなあ……好きやろ、旦那はんのこと？ 別に隠さへんでもええのに……」

「しかし……だがな、うう……!!」

酒吞が放った一言に、少女は深い戸惑いを露わにする。

全く予想だにしていなかった方向からの一撃は、なるほど彼女の急所を正確に射抜いたことだろう。言葉の意味は理解している。それが如何なる事実を示しているかも。ただそれが受け入れがたい、というだけのことなのだ。

確かに、彼は——奴は、自分にとって非常に稀有な性質の人間だ。ともすれば、あの綱めと同じか、それ以上に興味深い人間であることは間違いない。けれど、それはあくまで敵意や悪意という名の感情で、好意などというカテゴリに分類されるのは、非常に受け入れがたいことだった。

「あつ、あり得ぬ……吾が、人間を好きになど……!!」

もはや羞恥も極まり、顔を真っ赤にして少女は吐き捨てる。

それはない、と否定した。

それはあり得ない、と何度も否定した。

酒呑には悪いが、その推理は勘違いだろう。いや、勘違いであるべきだ。間違っても、そのようなことがあつてはならない。あつては——ならないのだ。

「そ、そういえばあの童女アリスやジャックどもが茶会を開くと言っておったな！ 甘いお菓子も出ると聞く！ すまぬが酒呑、吾はこれで失礼するぞ！」

それは実に見事な逃げっぷりだった。

走り去っていく少女の背を見て、酒呑は嘆息を零す。

「ほんまに素直やないんやから……手の掛かる子やわあ」

彼女としては純粹な善意で教えたつもりだった。

同胞で、戦友で、無二の友人でもある少女が、自分と同じ相手に好意を持っている。なれば、これ以上に嬉しいことはないだろう。

「せや、ええこと思いついたわあ。ふふ、どないなんやろ……？」

少女は手を叩くと、恍惚な表情で笑った。

その笑みにあるのは、善意か悪意か――。

この時、酒吞が思い浮かべた企みを、当の二人はまだ知る由も無かったのだ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

――夜。

深い眠りの心地から目を覚ます。が、それはベッドの上でなどという安寧な状況ではなく、椅子に拘束された状態での最悪に近い覚醒だった。

「おはようさん。気分はどや、ますたあ？」

「……ああ、やっぱり君だったか酒吞。それで、この状況はいつたい何なのかな？」

目覚めた自分を、艶やかな雰囲気の少女が出迎える。

アサシンのサーヴァント、酒吞童子。鬼である少女。自分がいるこの場所も、おそらくは彼女に与えられた自室の中だろう。そして、この状況を作り出した犯人も、十中八九彼女と見て間違いない。

「なんや、大して驚いてへんのやね」

「自慢じゃないけど、けっこう慣れてるからね。耐性ついちゃったのさ」

退屈そうに酒吞は嘆息する。

こう見えて拘束には慣れている（主にメルトやステンノ、エウリュアレあたりにされることが多い）ので、思ったほどの驚きは無い。慣れって恐ろしい。

「まあ外してって言うても外してくれないだろうし、気が済むまで付き合うよ。それで？」

俺は何をしたらいいのかな？」

「んもう、旦那はんったら弄りがいいわあ。うちかて鬼なんよ？ そないにされたら、自信失くしてまうやないの」

心底残念がる酒呑。期待に沿えなかったのは謝るが、ともかく本題だ。

考えられるのは、彼女との日常的に行われる魔力供給——プレイの一種だということ。

好奇心旺盛で享樂的な彼女のことだ。これもそうした興味から来る、ある種の余興なのだろう。自分としても窮屈ではあるが不本意ではなく、しかしそんな俺の推理を、少女は首を振って否定した。

「それも面白そやけどな……今日はうちが主役やないんよ？」

「それってどういう……」

不思議に首を傾げると、いそいそと酒吞が動き始めた。

室内に置かれたベッドの上。よく見ればそこに布団に包まれた「何か」がある。もぞもぞと蠢き抵抗を見せる、明らかに生きているもの。それを酒吞は一息に剥がし取り――。

「ぶはあ！ ……な、何をするか酒吞ッ！？ 蒸し焼きにされるかと思ったぞ！！」

「い、茨木！？」

そこにいたのは、後ろ手に縛られた一人の少女だった。

口を縛っていた縄も解かれたことで、茨木が途端に激しく叫ぶ。

ある種、捧げられた供物の如き悲惨さを感じさせる光景だが、当人の茨木にもこの状況が何であるかが分からないらしい。彼女も自分と同じくして捕まり、ここに連れてこられた被害者なのだろう。

「堪忍な。これもあんたのためや思てしたことなんよ」

「吾の、だと……?」

少女が不思議そうに問いかける。

それに酒吞は意味ありげに笑って。

「うちな、茨木にはもおっと旦那はんと仲良うなって欲しいんよ。せやから……なんて言うん、アレ? 恋のきゅーぴっど? そうソレ。なんや人間らしいことしてみとおなったんよ」

「っ……余計な世話にすぎるぞ、酒吞。斯様な氣遣いは、吾の求むるところでは——」

茨木は寂しそうに吐き捨てる。

酒吞が取った行動の真意——それは彼女が「キューピッド」を名乗ったことからも明白だろう。無論、たとえそれが善意からの行動であれ、当人にとって望ましいか否かは全くの別問題だが。

(そりゃそうだよなあ……人間の俺となんて、仲良くなりたくないだろうし……)

心の中でそう納得する。

酒呑の気遣いには感謝するが、こればかりは仕方のないことだ。茨木の言う通り、本人の意思が向かない以上、酒呑のそれは余計な気遣いでしかない。……非常に残念だが。

「ぬ……何故そう辛い顔をする。汝とて、吾のような生粋の鬼……遠ざけたく思うことこそあれ、仲を深めたくなるような存在ではなからうに」

茨木はそう言うが、俺の気持ちとしては違った。

種族が異なれども、彼女は共に戦ってくれる頼もしい仲間だ。マスターとして親交を深めたいのは当然であり、男としても、彼女は魅力的に映る存在だ。

「ッ——た、たわけたことをぬかすな貴様あ！ 吾は人間に気を許したりなどはしない、それはマスターであっても例外ではないぞ！ ほ、本当だからな！」

「……ああもう、まどろっこしゅうてかなわんわあ」

そんな俺と彼女のやりとりを億劫に感じたのか、酒吞が苛立ちまじりに立ち上がる。視線は真っすぐにこちらを向き、獲物を睨むかの如き様子で接近。小さな口内に何やら酒をゴクゴクと含んだかと思えば、有無を言わせぬままに唇を近づけ――。

「ッ――!?!」

「んむう……んじゆる、ちゆく、つぶつ、んくッ――ん、んんっ……ふはあ♡」

「ななな何をしておるのだ汝ら!?!」

茨木が叫び戸惑う中、酒吞の強引な口付けに襲われる。こちらの顔を両手で挟んで、逃さないようにと迫る濃厚なキスだ。

それに――これは酒、だろうか。甘く、何処か透き通るような味わいの液体を流し込まれ、否応なしに身体が熱くなる。少女との口づけに興奮しているだけ、ではなさそうだ。

「ふふ……これなるは千紫に万紅、鬼も蕩かす神便鬼毒。毒と酒は紙一重なんよ」

「酒呑！ まさかその人間にアレを呑ませたのか！？ わ、吾ら鬼とは違うのだぞ！？  
脆弱なりし人間の身体では、間違ひなく死んで——」

まさに鬼気迫るといった様子で心配を叫ぶ茨木。

友人である少女の凶行に、彼女も乱心を疑ったことだろう。

（心配せんでもええよ。旦那はんを殺そやなんて、そないな氣いあらへんし。それに旦那はんには毒効かへんのやろ？ せやから、まあ黙つまあっておくれやす）

耳元で囁いてくる酒呑の言う通り、この状況に恐れを抱いているのは茨木ただ一人だった。

対毒スキルのある自分に、生中な毒性は通用しない。それを分かって酒呑も毒にすらならぬ酒を呑ませたのだろう。事情を知らぬ者にとっては、正真「人間を殺し得る毒」として

映るような、そんな酒。間違はなく死とは無縁の、それを。

「こらあかんわあ。旦那はん顔真っ青やし、このままやと死んでまうやろなあ」

「なッ、なにを呑気にしているのだ酒呑！ 一瀉千里に助けねば、マスターが……！」

安穩とする少女と、危機を叫ぶ少女。

純粹で、無垢で、酒呑を心より慕う彼女には、この仕組まれた状況に隠された意図には  
気付けなかったのだろう。一方の酒呑はと言うと、わざとらしく笑みを浮かべて告げる。

ああ、それはまるで手を差し伸べるようにして。

「——ほな、茨木はどないしよつか。助·け·た·い·ん·や·ろ、マ·ス·タ·ー？」

∞  
∞  
∞  
∞  
∞  
∞

「……本当にこうすれば助かるのだな酒吞？」

訝るように茨木が告げる。

目の前の異質な状況に、流石の彼女も疑わずにはいられなかったようだ。

「うちの言うこと、信じられんの？」

「い、いや、そんなことはないぞ！？ 吾が酒吞を疑うことなどあるものか！」

(パワハラ上司……)

などと感じていると、改めて茨木の視線が「それ」と向き合った。

「っ……これが、こんなモノが人間の……雄の生殖器なるか。歪で、熱く、不気味極まりない。それに……んっ、臭いもひどい。吾の……知らない臭いだ……」

少女が目になっているもの、それは男である自分の愚息に他ならない。

椅子に拘束されたままではあるが、その部分だけは自由であることを喜ぶように。

おそらくは先に吞まされた毒酒に、媚薬としての成分も含まれていたのだろう。全身を迸る熱気と焦燥感は、勃起という生理現象によって現れる。

「おい……これはあくまで、その……貴様に借りを返すためだからな。人間なんぞを助けたくはないが、仕方ない。だから……し、死ぬなよ」

足元に座る少女は、不満げにこちらを見上げた。

毒に犯された身体ならば、毒を抜き出せばいい。

そんな安直にすぎる酒呑からの提案を、まるでその方法が唯一でしかないと言わんばかりに茨木は受け入れた。つまりは、精液として毒を放出する、その曖昧な方法を。

「ほな、始めよか」

「うむ……っ、く……これで、良いのか……？ 吾にはほとほと分からぬが……」

酒呑に促され、茨木は手を動かし始めた。

右手で円を作り、起立した陰茎に添える。

そうして上下に動かし、シコシコと擦るような、たどたどしい愛撫。

彼女を騙している状況に罪悪感が無いワケではないが、眼前の異質な光景に身体はどうしても興奮を覚えてしまう。自らのものを握らせている状況に、歪んだ思いさえ浮かんできた。

「もっと強うせんと。そないにおっかなびっくりやと、旦那はん助からへんよ？」

「し、仕方ないではないか……！ 吾、こういうこと初めてだし……母上にも教わらなんだ。んっ……大きすぎて、吾の手には余る……人間の雄は皆こうなのか……！？」

地雷源を進むかの如き慎重な愛撫を続ける茨木。

優しく、繊細で、時には加減が分からず大胆になる手つきに、不規則かつ断続的な快感

が身体を押し寄せてきた。

初めてだというセリフは真実その通りであるのだろう。

だが、それが思いのほか気持ち良く、分からないながらも懸命に愛撫する少女の姿勢が、ゾクゾクとこの胸を満たしてくれる。

「ッ……………」

「い、痛くしたか！？ すまぬ、もう少し優しくすべきか…………？」

——いや、いい。そのまま続けてくれ。

こちらの反応を苦痛と捉えたのか、少女が心配そうに上目で見つめてくる。けれど心配はいらない。寧ろ十分なほどの刺激だったので、安心させるようにそう告げた。

「そうか…………なら貴様の言う通り、このまま続けよう。どうだ、気持ち良いか…………？ 吾の武骨な手では、貴様を満足させられぬかもしれぬが…………」

謙遜の必要は無い。

彼女の手はなるほど確かに人間が有するモノとは異なるが、それでも手触りは少女同然であり、伸びた爪にさえ注意すれば、何処にも問題は無かった。

言葉の端々に気品さを備えたこの少女のことだ。

生前は厳しい規律の中で育てられ、あるいは蝶よ花よと育てられたに違いない。そんな茨木が見せる初めての愛撫は、卑猥さの中に何処か上品さを感じさせる丁寧な手つきだった。

だから「気持ち良いよ」と——彼女に対する所感と一緒にそう告げると、途端、茨木が激しい動揺を見せた。

「恥ずかしくなることを言うな、たわけ……！ 汝に褒められたところで、嬉しくなど……！」

動揺をひた隠すように愛撫の動きが加速する。

上下にゴシゴシと運動する手つきによって、肉棒の敏感な部分を容赦なく攻めてくる。

「奇妙な感じだ……斯様に不細工な代物、初めは触りたくもなかったというのに……！」

自分が手にした男のイチモツを興味深く見つめる茨木。  
嫌悪の象徴でしかなかったそれを真剣に、隅々までを観察する。

「少しずつだが分かってきたぞ……汝のここ、この辺りが良いのだな……？ 先ほどからピクピクと反応しておる……有体に言うなら弱点というものか」

徐々に自信を抱き始めた少女の手淫が力を増していく。

裏筋をツートと滑らせていく指の動き。カリ首をくすぐる手つき。果てには敏感な亀頭を丹寧に擦りつけ、この肉棒に膨大な快楽を叩き込む。

まさに鬼に金棒と言った具合だ。知識を付け始めた彼女ほど恐ろしい存在もそうはいまい。

「ふっ……吾が怖いか、恐ろしいか……！ そうであろう、そうであろう！ ようやく貴様も吾の恐ろしさを理解したと見える。吾を見る目はそうでなくてはな！」

などという感想を告げると、茨木が愉快げに哄笑した。

普段からマスターである自分に畏怖を求めてくる少女のことだ。カタチはどうであれ、俺が恐ろしいと感じた事実が嬉しくて仕方ないのだろう。

無論、恐怖を感じたのは事実だ。瞬く間に成長を遂げた少女は、こちらの快感をいとも容易く引き出してみせる。そうして蓄積した快楽は、射精という現象によって解放を迎えようとしていた。

「なっ、急にビクビク動いて……！ 大丈夫なのか、これは……どうなっても知らぬぞ吾……！」

一段と硬さと熱を帯びた肉棒を見て、茨木が不安に泣き叫ぶ。

知識も経験もなく、おそらくは射精という行いの理解にすら乏しい彼女にとっては、何が起こるか不安で仕方がないのだろう。だが——心配はいらない。それは人間として、男として、あるべき当然の姿なのだ。彼女のおかげでそうなったのだ。

「吾の——そう、か……それは、何というか……嬉しい、とは違うが……不思議な気分だ……今は汝を満足させたい、その思いだけが強まっていく……」

一心不乱に腕を動かす茨木は、徐々に息も荒くしながら力を込める。

その熱意に押され、肉棒の先を快樂の塊が突き抜けた。

膨大な量の欲望の放出。男の象徴たる体液の発射。すなわち——射精。快樂が限界に達した、その証左なればこそ。

——ビュルツ、ビュブツビュルルツツ……!!

「にやわっ……!!? ん、んんっ……なんだ、これはっ……!!? ん、ううん……吾の顔に、汝の熱いのが掛かって……うあ、ッ——これが、精液、なのか……!!?」

途端、爆発を迎えた陰茎は、その先端から白い衝動を勢いよく吐き出した。

間近で愛撫を続けていた茨木にそれを避けることは叶わず、熱しきった精液は少女の顔面を染めるべく軽快に放たれる。まるで白い化粧の如き様相だ。自分のモノで汚してしまっているとあっては、罪悪感も甚だしい。

思わず大丈夫か、と——そう声を掛けたが。

「ん……ちゅく、っ……んく、うん、っ——♡」

自身の顔面に注がれた精液を、茨木は指に取って舐めていた。

興味があったのだろう。初めて見るそれを、味わいたいと願ってしまったが故に。

そのいやらしい姿に興奮を覚え、肉棒は尚も彼女の顔を汚していく。尿道に残った白濁をビュッビュと射出し、最後の一滴まで少女の期待に応えるようだった。

「ごくろうさん、茨木。よう頑張ったなあ」

「んっ、酒呑……これで、毒は抜けたであろう……?」

「せやけど……茨木はそれでええの? 旦那はんと、もっと仲良うなりたいんとちゃう?」

「何を言っ……のわっ!?!」

そんな余韻に浸っていた少女を、途端、酒呑はベッドに押し倒した。強引に膂力で制された茨木は、為すすべなく天井を見上げる。いつの間にか拘束も解かれ、自由になった俺を見つめて酒呑は告げた。

「旦那はんも助けてもろうたんやさかい。お返しせなあかんよ、ふふ」

「んなっ……しゅ、酒呑！ 吾は——ひうんっ……♡」

嬌声。尚も抵抗を見せた少女の下着を……股の下にありし花園となる部分を、酒呑は優しくなぞってみせた。

それだけで唐突に甘い声が囁かれ、茨木の相貌が見たこともない色に染まっていく。密かに愛液が滴り、少女の身体を作り変えていく。

ああ、だから自分の心も蜜に誘われるように支配され——。  
手招きされるが如く、自分もベッドへ向けて歩み出していた。



結果的だけを見れば、酒呑の企み通りの展開だったと言えなくもない。

「うっ……」

「……今更だけど、本当に良いのか……?」

まるで押し倒すように——否、事実として押し倒しているのだろう。ベッドに仰向けとなった少女を覆い被さるようにして、一抹の理性を働かせてそれを問うた。

たとえそれが膳立てされた状況であったとしても、最後の一線を超えるのはやはり自分の意思を置いて他には無い。あるのはただ、少女と交わることへの巨大な責任感だった。

「……善い。母上は『色事は婚姻を結んでから』と言っておったが……鬼である者の道理を、人間の貴様との関係にまで持ち込む義理は無い。まったく……毒であるなどと、よくも

まあ吾を騙したものだ」

「気づいていたのか……？」

「当然だ。吾とてそこまで阿呆のつもりはない。おかしいとは薄々思っではいたが、これも酒呑の計らいなればこそ、従わねばと己に言い聞かせていたまでだ」

「だったら何故——そう問いかけた。」

「気づいた以上、無理に付き合う必要は無い。」

「如何に酒呑の言葉であれ、そうまで身体を張る必要もないだろう。」

「ふんっ……吾にも酔狂に身を委ねなくなる時の一つや二つ、あるものだ。そうでなくとも人間とま……まぐわうなどと、気が狂うてなければ出来ぬだろうさ」

「……………」

「勘違いはするな。したら殺す。男であれば誰でも善いというワケではない。貴様ならばと吾が認め、吾が赦した。汝は人間ではあるが、興味がある。こうして肌を重ねても善いと思うぐらいにはな……」

少女の真つすぐな瞳に、胸を射抜かれた思いに満たされる。

いまだ警戒を解かない猫のような雰囲気ではあるが、それでも種族を越えて信頼されたことには変わりない。正直に言えば、それがとても嬉しかったのだ。

「汝こそ……吾のような異形と交わろうなどと、気がおかしくなったとしか思えぬな。女としても退屈にすぎる我が身だ。それとも……我がマスターは、そうでなければ興奮できぬ、変態という生き物だったか？」

茨木が意地悪く笑う。

卑下した自分を武器にすら使う嘲笑だったが、果たしてそうだろうか——と。

客観的に見ても、茨木は美しいと称賛されるだけの容姿の持ち主だし、このカルデアでも随一の気品を纏う女性である。仲間想いであることも魅力的で、鬼としてあろうとする

健気な心意気も美しい。控え目に言っても、そんな彼女のことを自分は大好きだった。

「にやわあっ!?!? きっ、貴様あ吾をからかって楽しんでおるのだろう!?!? そうだな、そうであるな!?!? くっ……そのような甘言で吾を惑わそうとは、おっ、覚えておくがいい!」

正直な気持ちも伝えたつもりだが……どうやら怒らせてしまったらしい、反省しよう。

「ん、くっ……吾の……に貴様のそれ、が……」

少女が恐る恐る見つめる中、自分も着々と準備を進めていく。

ベッドで横たわる彼女の、開脚された両脚の付け根へとゆっくりと肉棒を近づけ……亀頭先端が陰部と触れ合った瞬間、茨木が甘美な声を鳴き洩らした。

綺麗だ、そう感じずにはいられない。少女のそれは何ら人間と変わりなく、それでいて未だ侵入されたことのない神聖な気配を放っている。

幼さの残るスジを見てしまえば、彼女が鬼であることも忘れてしまいそうなほどだ。

今にも挿入を果たそうとする陰茎を前に、茨木が一切の抵抗を見せないでいてくれるの

は、やはり自分を信頼してくれてのことだろう。

それが存外に嬉しく、そして彼女の期待に応えたいと願った。だからその瞬間、肉棒は少女の穢れなき部分へと侵入を開始して――。

「ツ――あ、ああっ……ん、くうあああああつっ……♡」

薄い膜を突き破る感覚。

力強く腰を押し出すと、茨木が悲痛な表情で泣き叫んだ。

思わず心配になってくる。――大丈夫、痛くない……？

「い……痛い、痛いぞ貴様ぁ……！　こんなに苦しいなんて、母上からは聞いておらぬぞ……！」

目元に涙を滲ませて、必死に訴えてくる茨木。

申し訳ないことをした。だけど、こればかりは耐えてもらうしかない。

せめても気分を紛らわせようと頭を撫でたが、少女が不思議そうに見つめてきた。子供

扱いたしやうで怒らせてしまったかと思つたが、茨木は落ち着きを取り戻して告げる。

「いや、いい。続ける……不思議と、汝にそうされるのは嫌いではない……痛みも和らいでいく感じで、安心する……」

穏やかに目を伏せる茨木を見て、自分も何処か胸が落ち着くようだった。

あまり無理はさせたくないが、仕方ない。

ただ一言「動くぞ」と伝え、こちらも腰の律動を開始した。

「ん、ッ……あ、んあ、はうあ——ッ、ん、ふう……あ、ああ……♡ んんっ……あ、おっき、い……吾の、膣内……ぜんぶ、汝の、が……入ってるッ……♡」

肉棒が膣内を走り出した瞬間、茨木は更に苦しさを覚えた様子で喘ぎ始めた。

初々しい硬さの残る少女の体内。見た目同様に小さな膣内は、けれども大量の愛液を分泌して俺を受け入れようとする。根本まで深くつながった状態ではあるが、それでも窮屈なことには変わらない。

だが、不思議と胸を温かい気持ちで満たしていった。

結合部から、自分と同様、恍惚とした彼女の想いが伝わってくる。他の誰でもない、お互いが隙間なく繋がり合えたことに、幸せであると主張するようだった。

「はあ、はあっ……ん、くっ……吾のナカ、貴様のカタチに……広がってっ……んはあっ♡  
痛い、のに、心地良いっ……こんな感覚、初めてっ……んんんっ♡」

小さな蜜壺を掻き分けるように、夢中で腰を振り続ける。

一種の独立した生物として稼働する少女の膣ヒダは、肉棒を愛おしくも抱きしめるように、彼女自身も全身を使って主張し、更に深く繋がりを求めてくる様子だった。

「はあ、ああ、んうああっ……マス、ター……くうんんっ♡ もっと、やさしくっ……手加減、せぬかっ……♡ これ以上されると……吾の膣内、壊れてしまうぞっ……♡」

加速していく抽挿運動に、余裕がないことを叫ぶ茨木。

初めてなのだし、自分としても彼女の身体を大切にしたいという思いはあったが……止

まらない。自分も彼女も、理性とは違う部分で互いを求めてしまっている以上、衝動を収めることなど出来るはずもなかったのだ。

その証拠に、少女の膣壁はまるでキスをせがむように吸い付いてくる。言葉とは裏腹で、より一層の快楽を求めているような貪欲さ。そのことが自分を更に暴走させる。

「んう、ンあぁっ、はっ、ンっ——あんっ♡ あっ♡ はっ、はぁっ……♡」

次第に表情もだらしなく、舌を出して少女が喘ぎだす。

膣口はキュンキュンと悲鳴を叫び、幼いながらも快楽の心地に震えているようだった。

「ましたー……吾の、ツ——膣内……そんなに、気持ちが、良いのか……？」

互いに性感が高まっていく中、少女が思い出したように尋ねてくる。

無我夢中で腰を前後させる自分の様子が気になったのだろう。その問いには「ああ」と即座に答え、証明するかのように彼女の膣奥へ向けて力を吐き出した。

「んっ、ふう……ッ、んんっ、はう、んう……ん、んくうッ……♡」

そんな俺の態度に恥ずかしくなったのか、あるいは満足そうに茨木は顔を赤らめ、目も閉じて一心に快楽を受け止める。

自分としてもこれ以上は限界だった。人間の少女以上に「少女」らしい茨木の一面を見て、肉棒は彼女の全てを愛したいと願いを叫んでいた。

「ッ……射精すぞ、膣内に……全部——！！」

自分という存在。少女の内部へ自らを刻み込むという行い。躍動を始めた陰茎は、渾身を以てラストスパートを掛けた。

「ふああっ、アッ、やっ……ん、あっ、あああんっ……♡」

最奥。側面のヒダを擦りつつ突き上げた子宮口の感触に、ついにという思いが極まった。可憐にして無垢。繊細にして清楚なる鬼の少女は、甘い声を鳴き漏らしてよがる。

「ん、そこっ……ズリズリって……汝の、硬いのが……奥、来てるっ……♡」

一番奥の部分を開通せんとして激しさを増す肉棒に、茨木の矮軀がフルフルと小刻みな振動を描き始めた。

絶頂が近いということの証拠。加えて射精も間近という状況にあれば、やはり一つの疑念が湧いてくる。当然と言えば当然の、膣内へ射精するという行為がもたらす一つの結果だ。

「構わぬ、っ……吾とて、子を為すことの仕組みくらい、知っておる……汝が、吾をはっ、孕ませたいというのであれば……んっ、それは——吝かではない、というか……♡」

「茨木……」

「だが、ゆめ忘れるなよ……？ そうなった暁には、ちゃんと責任を取ってもらうのだからな……！ 吾と共に魍魅魍魎を率いて……共に暮らすのだから……！」

そんな脅しでありお願いでもある約束に、言葉にせずとも肯定した。人間と鬼。仮にそこから生まれてくる子供は、半人半妖の存在か。

巴御前や風魔小太郎。鬼の血を引く英霊には何人か知り合いがいるが、まさか自分がそれを為すやもしれぬとは思ってもいなかった。

無論、覚悟はある。責任も。カルデアにおける全ての戦いが終わった後、彼女とそんな将来を過ごすのも悪くない。

果てしない想像に、下腹の奥でグツグツと熱が湧き上がる。それが決め手となったのか、瞬間、欲望は一気に爆発した。

——びゅくっ、びゆるうう、びゆるるるっ……!!

「ん、ひゃあうううんんっ……!! んふあ、アツ、あああ……はあ、んあああ……」

何時になく激しい解放感が肉棒を押し寄せ、同時に、憚ることを知らない嬌声が少女の可憐な口から飛び出した。

びゆる、びゆる、と。俺自身も意識が酩酊するほどの快感に打ち震えながら、幼い膣内へ幾度も精を注ぎ込む。深く密着した状態で、更には刻み込ませるように何度も押し付けて。

「はあ、ああ……あつ、あんっ……やめ、っ……♡ 射精しながら、奥、押されてっ……♡」

絶頂に震えながら、尚も襲い来る敏感な刺激に茨木が悲鳴を叫ぶ。

グリグリと子宮口を突かれる感触に、許容しがたい快感に襲われたのだろう。

「っ……こんなに、射精るものなのか……吾の腹が、汝の精液でいっぱい……」

津波のような快楽が収まると、少女が自身の腹部を奇妙そうに見つめた。

ぽっこりと僅かに膨らみを見せた彼女のお腹は、ある意味では子供が出来ているように見えなくもない。そう思ってもおかしくはないほどの精液を、受精を確実視するかの如き大量を、自分は吐き出していた。

「ふん……物好きなマスターも、いたものだ……吾は鬼で、母になるには早いというに……」

けれども、そこに嫌悪や後悔の意思はなく。

「吾のような鬼を魅せたのだ、責任はちゃんと取ってもらおうぞ。未来永劫……な」

∞  
∞  
∞  
∞  
∞  
∞

—— 厨房。

「——  
チ  
チ  
チュン  
——  
「!」

「痛あ!?!」

こっそりと伸ばされた手を、容赦の無い平手打ちが叩き落とす。

「またでちか茨木、あれほど何度もつまみ食いはいけまねと言ったはずでちよ」

「ぐ、っ……甘美な匂いがしたのだ、仕方ないではないか……！」

厨房を轟く説教と悲鳴。

朝食を作る最中、紅閻魔はこっそりと忍び込んだ少女へ向かって溜息を吐く。

つまみ食い。犯人など考えるまでもなく、茨木童子そのサーヴァントだ。

無論、少女の目が黒い内はつまみ食いなど許すはずもなく、こうして何度も返り討ちにあっては懲りずに立ち向かう茨木ではあったが――。

「……と言いたいところでちが、今日の朝食、ちょうど誰かに味見をしてほしいと思っただころでちた。あちきは出来まねなので、お願いできまねか茨木？」

「む？ お、おお！ 当然だとも！ 吾に任せておけい！」

大役を任され、茨木が力強く名乗りを上げる。

そんな彼女の様子を、酒吞と共に自分も陰ながら見守っていた。

「……茨木って、何だかんだ言って紅ちゃんと仲良しだよね」

「生まれが同じ者同士やさかい、構って欲しいんとちやう？　うちは……ほら、こないな感じやし、元から面倒見はええ子やったしねえ」

なるほど、と納得する。

享樂的に生きる鬼たちを統率し、大江山の鬼の首魁として君臨した彼女のことだ。同族を想う気持ちは人一倍……いや鬼一倍強いということだろう。

勿論、それは茨木だけでなく、隣の少女も同じだということは知っていた。

普段は自由奔放なくせに、茨木のこととなると途端に甘くなる。彼女を愛おしく思うあまり、時には手段さえ選ばない。そんな少女がいることも、自分は知っている。

「ふふ、なんのことやろ。うちは鬼やし、うちのしたいようにしただけやわあ」

あくまで白を切る少女に、俺もこれ以上は何も言わなかった。

多少強引さは感じたものの、あれも友人を思ってたのだらう。

薄く笑いを零すと共に、少女へ向き直る。酒呑も満足したように笑っていた。

「これからも、茨木のことよろしゅう頼むわ。手間のかかる子やけど、末永く——」

少女からのお願いに短く首肯する。

共に見守っていきこうという、それは強い意思表示だった。

# 霊基No.19 宇津見エリセ



## PROFILE

身長：158cm 体重：48kg

不思議な神気を纏った準サーヴァントの少女。  
見かけによらず結構グイグイと来る。

魔力供給回数：133回 絶頂回数：178回  
好きな体位：立ちバック 処女喪失日：召喚から19日目

妊娠確率：66%【安全日】

「まあ君がどうしてもと言うなら構わない。  
私としてもちょっと……って、何を言おうとしてるんだ私……！」

## STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：A	★★★★★	知力：D	★★☆☆☆
体力：A	★★★★★	母性：D	★★☆☆☆
従順：C	★★★☆☆	反抗：C+	★★★★☆
淫乱：C	★★★☆☆	感度：B	★★★★☆

「サーヴァントだからね。ちゃんと言うことは聞くよ。  
君のしたいこと……もっと教えてくれる？」

# 霊基No.19 宇津見エリセ



## SECRET GARDEN EX

### SG1：辛党

衝撃的な味覚センス。彼女に好かれると容赦なく「素朴で香ばしい味」のプレゼントが贈られる。  
(バレンタインは)嫌な事件だったわ……

### SG2：美的感覚

独特なファッションセンス。羞恥心はあるものの何処かズレている彼女は、全裸リボンラッピングすらファッションの一つとして捉えている。

### SG3：ティーンエイジャー

中学二年生。思春期の少女。特殊な育ちをしているせいか世間知らずでもある。そのため色々と暴走しがち。思春期ゆえの衝動は彼女を恐るべき性欲魔神に仕立て上げる。

## WEAK POINT

**bust** : ★★★★★

年齢以上に育った二つの膨らみ。脇から腕を入れて揉むのがマナーだと教えたら、「そうなんだ、奥が深い……」と信じてくれた。

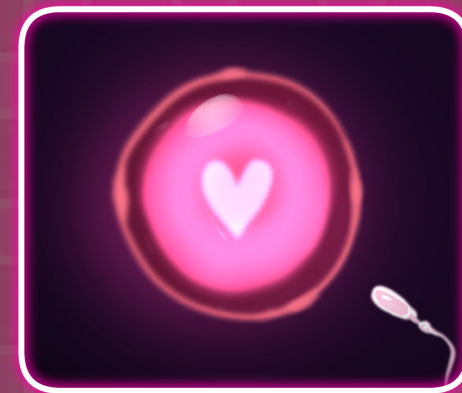
**underarm** : ★★★★★☆

脇をオカズにする、あるいは脇で擦る。そんなプレイがあると教えたら感心し、興味を持った少女は早速やってみることにした。

**vagina** : ★★★★★☆

程よく熟し切った膣内はペニスに絡み付いて離さない。おまけにエリセ自身も足を絡めて来るので、膣内射精を余儀なくされる。

## LIVE



状態 : ♥♥♥

「このまま続けてたら多分……いや、間違いなくデキちゃうよね。14歳で母親か……ああ、うん。嫌ってわけじゃないよ。寧ろ——」

遊戯界での騒動も決着し、このカルデアに新たな仲間が加入した。

「よろしく、エリセ。色々和不甲斐ないマスターだけど、なんでも頼ってよ」

「こ、こちらこそよろしく……うう、やっぱり慣れないな」

改めての挨拶に、少女は気まずそうに顔を顰めた。

ランサーのサーヴァントにして、かつては令呪を宿したマスターでもあったという不思議な少女・宇津見エリセ。遊戯界では敵対することもあった彼女だが、本人の希望もあり、今ではこうしてカルデアの一員となってくれていた。

独特な『邪霊』という力を行使し、おそらくは何らかの神霊に憑依された少女。

元は自分と同じマスターというだけあって、その精神性は英霊というよりも人間のそれに近い。14歳という年齢のせいか、俺にとっては「後輩」が出来た感覚でもある。

「へえ……これが噂に聞くカルデアなんだね。なんていうか、もっと騒がしい場所をイメージしてたよ」

「俺としては十分賑やかな印象だけだね。サーヴァントたちもみんな良い子だし、エリセのことも快く受け入れてくれるはずだ。だから、さ……そんなに緊張しなくても」

「そ、そうは言ってもさあ……」

どうしても緊張してしまう、そうエリセは語った。

彼女。宇津見エリセにとって、英霊は敬愛すべき隣人だ。

彼らの在り方、生前の生涯を尊重している少女にとっては、サーヴァント——英霊の現身たる彼らの集うカルデアは、興奮の冷めやらぬ場所でもあるのだろう。

「まあ、少しずつ慣れていこうよ。俺もそのための協力なら惜しまないからさ」

「……うん、ありがと」

到着して間もない彼女を連れて、カルデアの内部を案内する。

謙虚というよりは臆病な雰囲気だ。

初めは不安そうに後ろを歩くエリセだったが、次第にその表情にも明るさが見え――。

「あっ、新しい人だ！」

「本当だわ！」

するとそこで、廊下の先から無邪気な声が聞こえてきた。

エリセの姿を見るなり、嬉しそうに二人の少女が駆け寄ってくる。――アリスとジャックだ。

「紹介するよ二人とも。新しく仲間になってくれたエリセ……って、アリスは知ってるか」

「ええ。ボージャーの探してた人でしょ？ えっと……あっ！ そう、思い出したわ！」

アリスは記憶を探すように天井を見上げ。

「——痴女のおねえさま！」

「ち、ッ……!!？」

瞬間、世界が凍り付いた。

主にエリセを中心として何かがひび割れた。

「痴女ってなあに？」

「恥ずかしい格好をしてる女性のことよ、ジャック」

「へー、ほんとだ。おっぱい横からだど丸見えだもんね、恥ずかしくないのかな？」

「恥ずかしくないのかわ。ね、おねえさま♪」

「う、ぐ……」

少女二人の無邪気な発言に、エリセが言葉にならない様子で苦痛を呻く。

到着早々、痴女の誹りを受けるといふ……アリスたちの言動に何ら悪意を感じないのが余計に残酷だ。

「そりゃあ歓迎されてないのは分かってたけどさあ……これはあんまりじゃないかなあ！」

エリセは肩を震わせて。

「君も！ マスターならちゃんと説明してあげてよ、ほらっ！」

「……そうだと、アリス。いくら恥ずかしい格好してるからって、正直に言ったらまずい。趣味は人それぞれだからさ」

「なんのフォーローにもなってないんだけど！」

むう、怒らせてしまった。

俺としてはちゃんと説明したつもりなのだが。

「くっ……この格好、先生みたいでカッコいいとかちよっと思ってたのになあ……ま、まあ、常人に理解されずとも、私だけが理解してればいいよね。うん。……でも、痴女、なんだ」

がっくりと項垂れ、壊れたテーブルコーダーのように同じ言葉を繰り返す。

確かに、彼女の恰好は痴女——かどうかは置いといて、非常に危うい姿であるのは間違いない。

ベースとなるのは、日本の神話を思わせる服装だ。

前掛けのような布を胸と背に一枚ずつ。首回りを縄、胴体を長紐で結んでいるだけなので、側面を守るものは一つとして存在しない。唯一下半身を禪で守っているが、その結び目も、絹の如き白い大腿部に、年齢にしては発育の良い胸部も、ほとんど丸見えに等しいのが実情だ。

「あつ、マスターったら目を逸らしたのだわ」

「ほんとだね。どうしてだろ？」

「い、いや、それはだな——俺も男だし、目のやり場に困ってしまうというか……」

言いかけて気が付いた。無意識に逸らした視線の意味。それを少女たちに説明した瞬間、警戒したようにエリセが自分の胸を隠していた。

「なんか……ごめん。君も一応……男の子、だもんね。配慮が足りなかった」

「いやエリセの謝ることじゃ……」

「別に良いよ。なんて言うかさ……ほんとごめん！」

「あっ、エリセ！」

気まずさに耐えかねたのか、少女が謝罪と共に走り去っていった。

その後ろ姿を追うこともできず、契約早々やってしまった——そんな後悔に項垂れるのだった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「はあ……何も考えず逃げてしまった。悪手だった……よね。彼にも悪いことをした」

誰の気配も感じなくなったそこで、エリセは深い溜息を吐いた。

自分は何をしているんだろう。逃げたところで、顔を合わせづらくなるだけだろうに。

145 「でも……そっか。英雄でもなければ、生粋の魔術師でもない。普通の……普通の人間、そ

れが君なんだ。異性の身体を意識するぐらいには普通の……それが私のマスター……」

エリセは改めて自分のマスターとなる存在を整理する。

初めは——あの遊戯界で出会った最初の印象は、サーヴァントたちを良いように使役する恥ずべきカルデアのマスターであると、そう愚弄したことを覚えていた。

しかし、その認識は幾つもの戦場を踏破することで覆された。

彼の戦い、彼の背負っている使命。そのために尽力するサーヴァントたちの存在。

それらを知った今、自分の心にかつての嫌悪感は存在しない。寧ろ、偉そうなことを言ってしまった自分が憎くさえ思えてしまう。

「……うん、次会ったら謝ろう。カリンと毎日してたように……はマズいか。落ち着け私」

胸に手を当て、深呼吸する。

そんな——サーヴァントとなってからの瑞々しい生活。カルデアに喚ばれ、多くの仲間たちに囲まれる中で、エリセは自分の精神が変化しつつあることを自覚した。

『私には構わないでいい。もっと他のサーヴァントにリソースを割いてあげて』

夜警として、一人で戦っていた時では考えられない充実感。

死神と呼ばれ、ただ標的を殺すのではない。綺羅星の如き英霊たちと共に、護り・繋ぐための戦いへ参列できることへの喜び。

『物好きすぎる……いや、君が満足してるならそれでいいけどさ』

新たな生き方を教えてくれた彼には、感謝さえ覚えていた。

どうしようもないほどにお人好しで、どれだけ言っても世話を焼いてくる、そんな己のマスターに。

『もっと君のことを教えてほしい。だって君は……私の、マスター……だからね』

いつしか、彼は、自分にとって無くてはならない存在となっていた。

日々の戦いを通して、絆は如実に深まっていく。共にいられることが何よりも嬉しくて、

何度もレイシフトに同行したほどだ。

充実した毎日。忙しく駆け抜けていく日々。

そうこうしている内に、数日が過ぎて。

(マスター……今日は忙しそうだった。話したかったけど、今日はやめておこう……)

そんな、ある日。彼との会話が日課となりつつあったある日の夜。

エリセは物足りなさを覚えながらもマイルームのベッドに寝転んだ。

枕に顔を埋めて、一人未練を吐き零す。

ただの一日、ただの一度でこれだ。この胸に渦巻くモヤモヤとした感覚は一向に晴れず、思えば思うほどに苦しみを覚えていった。自縄自縛だ、とエリセは自嘲した。

「まあ、明日になれば会えるよね。後輩、だから。先輩に会いに行くのは当然のこと……」

誰に聞かせるのでもない独り言を吐き零す。

人間だった頃の感覚が抜けないのか、サーヴァントとなった今でも眠気に襲われる。

「そうして、徐々に瞼が下がり――。」

「マスター……ん……」

頭にその人を思い浮かべつつ、エリセの意識は深い海の底へ沈んでいった。  
この時の彼女は思いもしなかっただろう。  
まさか「あんなこと」になるとは――と。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ん……ここ、は……?」

気怠さを覚えつつ、俺は目を覚ます。  
雲の掛かった意識は、そこで奇妙な違和感に襲われた。

「何かが——何かがおかしい。漠然とした異変。体調に変化はない。よくあるような「起きたら不思議な異世界に飛んでいた」なんてこともない。ただのマンションの1室、別におかしいところは——。」

「——って、いや何処だここ！？ マイルームじゃない！？」

「……ん？ あれ、マスター……？」

「エ、エリセ！？ なんで君まで……！」

ふと横を見ると、見知った少女がそこにいた。

一つのベッドを共有するカタチで寝ていた俺とエリセ。

昼白色のライトに照らされた1室。キッチンや浴室を完備し、巨大な壁掛けテレビと、壁一面の窓ガラスが目立つマンションの1室。目覚めた自分たちがいたのは、そんな何処とも知れぬ部屋の中だった。

「えっと……これなに？ どういうこと？」

「……ごめん、俺にもさっぱりだ。レイシフトってワケでもなさそうだし……何だろう」

エリセと二人して顔を見合わせる。

だが、それらしい答えは出せずにいた。

あまりに情報が少なく、自分たち以外には誰もいない。危険すら感じられない平凡な一室にあっては、何をしていいのかすらも分からなかった。

——と、そこで。

「……この音楽」

「何処かで聞いたような……」

突如として鳴り響いた、ファンファーレにも似た短い曲。

それと同時に壁面のテレビが映像を映し出し、そこに表示された「遊・戯・開・始」という文字

に、自分たちはそこはかかない不安を覚えるのだった。

——これは、まさか。

自分と。特にエリセにとっては忘れられない、かつての出来事が想起される。続いて表示された「勝利条件」という文字とその「内容」を、緊張と共に見つめて。

「えーと、なにに……『勝利条件……この部屋を出るには……』」

ゲームへの挑戦には、往々にしてルールの説明があるだろう。

勝利条件と題された、この部屋を脱出する唯一にして無二の方法。

サーヴァントとマスター、男と女が一人ずつ。

閉ざされた空間で行うことと言えば、一つだけ。

その方法が画面に記されると、俺とエリセは激しい絶叫を上げていた。

「な、な、な……」

「お、落ち着けエリセ……！ なにかの間違いで——」

期待を込めて、文章を読み直す。が、その内容に変化はない。どれだけ読み直しても、それ以外の解釈はしようがなかつた。

これがゲームだとすれば、こんな頭の悪いルールを俺は知らない。  
誰かの策略だとしても流石にやりすぎだ、と。

何故なら、そう——。

通信も閉ざされ、帰還の方法も分からないお手上げな状況で。

唯一として提示された脱出の条件。その方法が——セックス、ただそれだけだったからだ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……ダメだ、やっぱり開かないか」

玄関の扉に手を掛ける。

見た目鍵は掛かっていないみたいだが、やはり開かない。

「……下がってて、マスター。——『エルケーンニツヒ魔王』!!」

転瞬、エリセが扉に向かって攻撃を始めた。

彼女の腕から伸びる黒い枝——『魔王』と呼称した触手らしきそれが、何の変哲もない玄関のドアに対し、夥しいほどの斬撃を喰らわせる。が、しかし。

「ッ……ダメだ。傷一つ付いてない……!!」

損傷した様子の無いそれを見て、エリセは悔しそうに吐き捨てた。

サーヴァントである彼女の攻撃力を以てしても破壊できない扉。物理的な脱出は不可能。おそらくは、部屋のどの部分に試しても同じ結果になるだろう。

「特異点……固有結界的な世界なのかな。それこそ対界宝具でも無い限りは難しい、か」  
壁を指でなぞり、自分たちが囚われた空間の異質性を認識する。

「まあ幸い生活には困らなそうだし、いづれカルデアとも通信が繋がる……はず。だから気長に救援を待つとしようよ、エリセ」

「……うん。君がそれでいいなら……」

何かを言いたげに、僅かに頬を赤らめて少女は頷いた。

寝室へ戻り、ベッドに腰かける。まるで詠えたように時間を潰すための盤上遊戯<sup>ボードゲーム</sup>

囲碁や将棋、リバーシはもちろん、花札、トランプ、バックギャモンにチェッカーまで、色々と揃っていたので退屈することはなかった。

「いめん。変なことに巻き込んでさ……」

黒と白の駒をパチンと鳴らして、エリセは自責するように呟いた。

「いやエリセが謝ることじゃないだろ。こんなのは事故みたいなもので……誰が悪いってこともないよ。不運な事故だからさ」

「……そうじゃない。私には分かるんだ。きっと、これは私のせいなんだって」

盤上にある最後の一マスを駒で埋め、少女は滔々と語り出した。

いまだ記憶に新しい、遊戯界でのこと。ボージャーに導かれ・辿り着いたあの世界は、聖杯の力により、宇津見エリセの心象を表した空間だった。

死神として多くのサーヴァントを葬ってきた彼女。そこにあつた後悔と希望。何より尊い彼らの末席に連なることへの夢を、聖杯は試練というカタチで実現させた。

無論、それは既に解決した試練だ。聖杯はカルデアが確保し、遊戯界は過去の記憶となっ

ていた——それが。

「きつと、まだ残っていたんだと思う。搾りカスのような魔力だけど……こうして小さな遊戯界が誕生する程度には、さ」

「それって……」

漠然と、話のスジが見えてくる。

ふとして盤上から視線を外すと、少女のまるで吸い込まれるような瞳に見つめられた。

「君が望むなら……この遊戯の簡単な解決方法を教えてあげる。まあ……わざわざ言わなくても分かるだろうけどさ。本当に……簡単なことだ」

エリセは深く深呼吸して。

157 「わ、私とせえ………せえッ………っす、すればいい。それで脱出できる………はず」

「エリセ……」

「君はマスターだから……こんな場所で監禁させたままにはさせられない。一秒でも早く戻った方がいい。だから、その……私と……そういう、ことを………はうあああ」

肝心の部分は聞き取れなかったが、ここまで説明されたら俺にも分かる。  
これが事実、遊戯界が誕生した理由と同じ、その延長——であれば。

「……俺は良いけど、エリセはそれで大丈夫なのか？」

「分かってるはずだよ。遊戯界は私の願いが生み出したもの……この世界も私が願ったものだ。馬鹿らしいと自分でも思うけどさ……君と、そういう関係になりたいんだ。サーヴァントとマスターの関係だけじゃない。君は——大切な人だから」

「ッ……!!」

真っすぐなその告白に、胸を深い衝撃が押し寄せた。

少女の荒い吐息も聞こえてきて、心臓が波打つように鼓動を刻む。

言葉は無かった。もはや互いに言葉はいらないと、無言のまま引き寄せられていく。

「んっ……くちゅ、れろっ、んんっんむ、んちゅる……♡」

気づけば、自分の唇はエリセのを奪っていた。

自分より年下の……14歳である少女との口づけ。サーヴァントである以上、そこに人間としての常識は通用しないが、それでも中学生と肌を触れ合わせている事実には、そこはかとなない背徳を感じてしまう。

「あん……んふっ、ぢゅる、んちゅ、れるっえろ、ずずっ……♡ ふぁ……これが、キス……君が、私の口の中でいっばいに広がってくる感じだ……なんていうか……すごい」

口の周りを唾液で汚し、エリセは驚きの声を上げた。

自身の口内を浸食した初めての感覚。知識としては知っていたが、実際に経験の無かったその行為に、心臓は音を立てて加速していた。

「エリセ……」

「うん、君の好きにしてほしい……できれば、その……一応、初めてだからさ。優しくしてくれると助かるけど……」

優しく笑みを浮かべた少女のお願い。

それを聞いて、自分も一つの提案をした。

「……え、胸を触りたい……？ ふうん……君も男の子だもんね。やっぱり、そういうのが好きなんだ……なんだか安心した」

くすつと笑うと、エリセはいそいそと服を脱ぎ始め——ちよつと待ってほしい。

「う、後ろから……？ 服は脱がなくていい……？ 君が何を言ってるのか……いや意味は分かるけどさ、なんていうか業が深くない？ カルデアのマスターさんて、そういう人じゃなきゃ務まらなかつたりするの？」

呆れたような、どこか引いたような視線。

だが、それでも——だからこそ、あえて言わせてもらおう。

14歳という魅力的な年齢。年齢相応に華奢な体軀をしていながら、著しく発達した豊かな胸部。ガードの緩い服装ゆえに、露出しかねんばかりに危うい……それが、エリセの格好だ。

男として。マスターとして。その誘惑には抗いがたい……否、抗ってはならないと考える。相応しい手段で触らなければ、彼女のおっぱいに失礼だろう。

「うわぁ……君ってほんとマニアックだね。まあ、そんな人を好きになっちゃった私も、問題があるんだろうけどさあ」

冷ややかな視線を向けて、エリセは溜息を吐く。

しかし、既に覚悟は出来ているのだろう。  
俺に背を向けると、両手を上げてそう言った。

「んっ……いいよ、マスター。ほら、後ろからでも何でも……好きにしているからさ」

脇を丸出しにして、エリセは恥ずかしくも告げた。

その蠱惑的すぎるポーズに導かれ、自分もゆっくりと腕を伸ばしていく。

前掛けの布との生じた隙間に、横合いからすると侵入して――。

「ひゃあんっ……!?!? んア、あっ……いきなり……うう、マスターに胸揉まれちゃって  
る……んっ、ふう……そんなに、面白いの……? こんな、何でもなし……行為が……ふぁ  
んんっ♡」

両手はその内側に彼女の双丘を収めた瞬間、エリセは甲高い嬌声を叫んだ。

そのまま俺は指を動かし、弾力のある少女の乳房を何度も揉み解す。

柔らかく、そして気持ちの良い質感を備えた弾力だ。背後からの愛撫に双丘は悉くカタ

チを変え、手のひらに吸い付くようだった。

「はっ、あっ……これ、ちょっと……いや、かなり変態……な感じがする……んんっ♡」

スロースタートな愛撫ではあったが、エリセの声は徐々に甘さを帯びていく。

「おっぱい……そんなに、好きなんだ……私のなんて、面白くもない、だるうに……あっ♡」

あくまで謙遜する彼女に、そんなことはないと耳元で囁いた。

年齢にしては発育の良い少女の双丘。決して巨乳と呼ばれる域には達せず、けれども小さいとは言えない膨らみは、型にはまった気持ち良さを与えてくれる。

やがて指先は胸の頂を責めるようになり、途端、エリセが悲鳴に似た声を上げた。

「んあ、あああっ、そこっ……くう、うんっ……先っぱ、痺れてっ……はあああっ、んっ、そんな……先っぱばかり、弄らないで……あっ♡ ンンッ♡」

コリっという弾力に富んだそれは、見えてはいないが、間違いなく乳首と呼ばれるものだ。

鋭い声を叫びながらも、エリセはくねくねと身体を震わせる。

俺に背後から一方的に触られているというのに、抵抗する様子は見えてこない。依然として脇を開いたまま、彼女は自分の胸が揉みしだかれる様子を眺めている。

「ダメっ……君の、触り方……私の弱いところ、的確に責めてくるっ……♡ ……え？ そんな格好してるのが悪い……？ わ、わたしだって……着たくて、着てるわけじゃひゃんっ♡ んっ♡ はっ、ンあ♡」

両の乳首を摘まみ上げると、エリセの身体がビクンと跳ね上がった。

硬く勃起したそれに引っ張られ、乳肉全体が面白いカタチに変形する。

「っ……やっぱり、君は……変態だ……どうしようもないほどに、男の子だ……！ 人畜無害そうに見えたのに、こんな、趣味があるなんて……これが、カルデアのマスター……ふひゃあっ♡」

「……嫌いになった？」

「そうじゃない……そうじゃ、ない、けど……！」

納得できない様子で叫ぶエリセだが、彼女自身にも次第に変化が表れて。

足をもじもじとすり合わせ、さながら尿意を耐えんとする彼女の様子に、自分も次なる手を打った。端的に言うなら、彼女の股間部分への愛撫である。

「くッ、あっ——ああっ、ンあああっ……♡　そこ、急にっ……指、入って……ンンっ♡　はっ、やっやあ……なに、これっ……マスターに、触られて……なんで、なんでこんなに、気持ちよくっ……ン、アッ、恥ずかしい……♡」

唐突に愛撫の矛先を変えた右手。下半身へと伸びていった一方の手は、少女の敏感な部分を容赦なく責め立てる。

何故を問われても、エリセの反応が分かりやすいからとしか言えなかった。

ぐじゅぐじゅに濡れた禪をずらし、少女の「少女」となる部分——淫裂に指を二本挿入したワケだが、ただのそれだけでエリセは声を激しく吠え叫ぶ。

未熟にすぎるその性器は指二本ですらも窮屈さを覚え、熱に満たされたその内部からは、彼女が快楽に染まりつつあることが明瞭に分かってしまった。

「そんなはず、ない……わたしが、いやらしい、みたいな……んっ、ううう……ふあああ♡」

言葉では否定するが、身体はどうしようもなく正直だ。

左手は胸を、そして乳首を絶え間なく愛撫。

右手は少女の膣内を、まるで蜜液を掻き出すようにして刺激。

更には空いた指で割れ目の上にある陰核——クリトリスを攻撃した。皮の上から肉豆を刺激し、敏感にすぎるその部分を撫ぜたことで、幼い少女の身体はいとも簡単に快楽を吐き出した。

「んっあう、はっ、はあ……これ、たえられないっ……♡ マスターの指で、気持ち良く……んんっ、はう、あっ、はんっ……んああっ、ふあ、やっ……ダメ、なにか……くるっ……♡」

ぶるぶると小刻みに震える少女の肉体。

乳首も肉豆もすっかり硬さを覚え、コリコリという感触が両手を伝わってきた、そんな時。

「……イッていいよ、エリセ。エリセがイクところ、俺に見せてくれ」

「ふああっ、アッ、やあああっ……マスター、わたしっ……ん、うううっ♡ あっ……くる、くるっ♡ 君の前で、なにかが……ああ、ふあああああっ、ますたー、マスターっ……♡」

何度も自分呼び、ぎゅっとエリセが瞼を閉じた瞬間。

「んくうううっ……！ あっ♡ はああああっ……♡」

ピクンピクン、と。絶頂。オーガズム。天井を見上げるように身体が跳ね上がったかと思えば、転瞬、一番大きな嬌声でエリセは鳴いた。

息も絶え絶えに、ぐったりと俺に寄り掛かってくる。

性行為に対して年相応の知識は持っていたとしても、経験は無い。ましてや彼女のいた世界では事実上の不老不死が達成されているそうなので、快樂自体にもあまり縁が無かったのかもしれない。

「これが、イク、って感覚……？ 絶頂……わたし、イッたんだ……」

興味深く呟いたエリセ。

全身を走る電流の如き衝撃に、淫穴からぷしゃあと噴き出した潮。

そのどれもが未知で、幼い肉体には過ぎた快樂だったろう。

(……部屋ゼイムに変化は無し、か。やっぱり最後までする必要がありそうだな)

部屋に飾られた液晶には、いまだ「終了」クリアの文字は浮かばない。

当然だが、いくら前戯で気持ち良くなるうと、それでは意味が無いのだろう。

「マスター……」

「……ああ」

エリセからの静かな視線を向けられ、自分も覚悟を決めた。

彼女の身体を優しくベッドに寝かせると、自分も緊張した手つきで服を脱ぐ。

下着の内側から現れたのは、見るも凶悪に成長した己のペニスだ。

血管を浮かび上がらせ、先走りの液を漏らすそれを、エリセは不思議な眼差しで観察する。驚くような、怯えるような、あるいは嬉しそうにも見える複雑な瞳だ。

「そんなに大きくなるんだ……いや君は男の子だし、それが普通……なんだよね。世界は広……ていうか私の見識が狭いのか。……ゴメン、やっぱりちよっと動揺してる」

眉を顰めるエリセだったが、視線は男のそれを一心に見つめていた。

その様子を見て、俺も一つの疑惑を告げる。

「やっぱり興味があるの？」

「やっぱり、って……まるで私が異性の性器に関心があるみたいな言い方だけど」

「いや、そんな話を聞いたからさ」

「誰に」

「ボージャー」

「なあっ……！！」

慌てて否定を繰り返すエリセ。

違う、あれはただの確認行為で、断じて興味があつてしたワケではない、と。

「はあ……変な勘違いしないでくれる？ キミに私がどう映ってるのか知らないけどさ、こ

れでも緊張はしてるんだ。本当に——私なんかでいいのかな、って」

声に影を落とし、暗くエリセが吐き捨てる。

俺の方こそ聞かせてほしい。本当に、俺が相手でもいいのか、と。

エリセに言われて改めて考えたことがあった。

サーヴァントとは聖杯戦争を勝ち抜くための、あくまでの道具。ただの道具に対して幻想を持つべきではなく、そんな当たり前の事実にする目を瞑っているようでは信用できない、そうエリセは語っていた。

「うん……そう思ってた。けど……キミの戦いは違った」

少女は続けて。

「きつと、それだけじゃ勝てなかったんだと思う。人理を修復するなんて戦い……そんな君がマスターだったから、ここまで辿り着けたんだと……私は思うよ。だから……あんな事を言った手前、恥ずかしいんだけど……その」

「エリセ……」

「私のことも、彼らと同じように見てくれたら嬉しい……迷惑かもしれないけどさ」

絞り出されたその願いは、果たして、俺の胸を打つ決定的な言葉となった。

「……ありがとう。本当は不安だったんだ。俺は君のマスターに相応しいのかって……でも」

「——信用してるよ。キミのためなら、何だって出来る……気がする」

優しく掛けられたその言葉が契機となる。

彼女の身体に覆いかぶさり、大きく反りあがった肉棒を少女の秘裂に押し当てた。

エリセの、真正正銘、無垢である蜜穴だ。

幼さの残るピンク色の割れ目に対して、狂暴な男のそれが熱気を放つ。

「う……ちょっとだけ怖い、かな。マスターのことは信用してるけど、初めてだし……」

隠しきれない恐怖を露わにし、エリセは少し涙ぐんだ様子を見せていた。

それを見て、せめても優しくすることを約束し、自分も腰を徐々に押し出していった。未使用の蜜壺に亀頭の先端がズプッと埋まり、僅かな抵抗感に阻まれる。少女の純潔の証だ。そこを。愛液に満たされしその膣道を。肉棒は覚悟を以て貫き――。

「んッ、アアあああああっつ……！　イ、ッ……く、ンう……キミのが、ナカまで……！！」

竿の半分程度が挿入されると、エリセは悲痛そうに声を張り上げた。

窮屈な少女の膣内は、男を追い出そうと必死に抵抗を見せる。結合部からは血を滲ませた愛液も流れ、少女の痛みの程を物語っていた。

「大丈夫……少し苦しいけど、それ以上に嬉しいから……」

涙を浮かべたエリセは、あくまで心配はさせないと笑顔を見せる。

ああ、その健気にすぎる姿を見て、どうして我慢ができればよいか。

気づくと、自分は更に腰を強く打ち出し、少女の奥深くまで肉棒を進めていた。

そこから腰を前後に律動させ、精一杯の理性と共にピストン運動を開始する。

「——ふああ、やあ、ああっ……♡ 奥まで、届いてるっ……マスターが、私の膣内  
で……いっぱい、動いて……ひゃう、ン、あっ、アああっ、セックス、すごい……♡ はあ、  
これが男の人の……おちんちん……んう、ああはアっ♡」

初めてのその感触を、エリセは荒い息遣いで以て受け止める。

幼い秘所は内部を少しづつ拡張されていき、雄の欲望に応えようとして。

「ン、んんっ……あっ♡ ンあっ♡ ますたーの、おちんちん……本当に、入ってる……♡  
ふあ、ああっ、硬くて、熱くて……内側から、壊される感じだ……ンああ、やああンっ♡」

苦しくも、エリセはその行為を正面から味わっていた。

未熟な蜜壺を俺のペニスに掻き乱され、真紅の滲んだ愛液を垂れ流し。  
無我夢中で挿挿運動を加速する—— エリセの膣穴は依然としてきつく、しかし、そんな俺を優しく迎え入れてくれていた。

「はあ……ああ、うあ、ん、ふうっ……♡ 指で、された時よりも……ああ、奥、突かれて……んんア、アんっ、気持ちいいの、止まらないっ……んんんっ♡」

どうやらエリセは、一番奥を突かれるのがお気に入りらしい。

初体験かつ14歳という幼さでありながら、既に性の素質に目覚めているのか。愛液でヌルヌルに滑りの良くなった膣道は、まるで肉棒の挿挿を助けているようだった。

「ち、違っ……そんなんじゃ、ないっ……♡」

そのことを指摘すると、エリセは恥ずかしそうに否定し。

「でも、こんなに濡れてるぞ？」

「ンン、はっ、ダメえ……そこ、ばっかり、いじめちゃ……♡」

わざとらしく愛液を指で掬い、子宮口をぐりぐりと亀頭で押し付ける。

すると感度の良いエリセは何度も甘い嬌声を零し、その反応が否応なく俺の興奮を刺激……肉棒の根本を中心として、快感の火種が芽生えつつあった。

「っ、いじわるだ……そんな風に、私を辱めて……よわいところ、ばかり、突いてくるし……♡」

きつと臍を強めてくるエリセ。

それは確かに申し訳ないことをした。が、気持ちよく反応するエリセがあまりに可愛く感じたことなのだ。どうか許してほしい。

「か、かわいいって……うう、わたしが可愛いか……お世辞でも、ちょっと嬉しい……あまり言われたことない言葉だし……死神とか、そんな呼び方しかされてこなかったし……」

んううっ♡

途端、少女の膣内が露骨にキツさを増し始めた。

不意を突いた俺の囁きに、身体の方が素直に反応してしまったのだろう。

肉棒を締め付ける感触は抽挿を繰り返すごとに強くなり、14歳の処女とは思えない経験値を見せつけてくる。

「んあ、ます……たあ……キミも、もっと、気持ちよくなって……ん、んんっ……はっ、はあ……わたしの、ナカで……おちんちん、気持ちよくなってほしいっ……あうん、うっ、ふあっ♡」

ギゅっと膣口を締め上げ、愛し気にエリセが囁いた。

口は絶えずして快楽を吐き出し、瞳はすっかり蕩けて焦点も定まらない様子だ。

だから自分も、より身体を密着させ、共に快感を享受するべく必死に腰を振るう。

今まで蓄積していた互いの感情を、ここぞとばかりに爆発させるように——そして。

「んっ、んああう、はあんっ、ますたー……これ、このままだと、わたしっ……ふあああ♡」

「嬌声と水音とが室内を反響し、その中でエリセが限界の到来を鳴き叫んだ。

膣道を前後する肉棒からもそれは明瞭に伝わってくる。

「絶頂。先ほどの衝撃が、再びの快楽が、今まさに彼女を訪れようとしているのだろう。マスターとしてそれは嬉しく思う。安心してイッてほしい——と。」

「や、やだっ……ちがう、そうじゃないっ……♡」

しかし、意外にもエリセの反応は悲しさを見せて。

「マ・ス・タ・ーも、マ・ス・タ・ーも一緒にじゃないとヤダっ……♡ キミと一緒にイキたい、一緒にイカせてほしいっ……♡ 一人に、しないでっ……♡」

「ッ……!!」

少女の懇願が頭蓋を叩く。

そこまで必死に訴えられ、断るなんて選択肢はあり得なかった。

「えっ……やんっ、ふあああっ……♡ ました、はげしっ、あっああ、ひあ、はあああっ……♡」

少女の思いに応えるべく、自分も快感を高めて腰を振る。

幸いにも彼女の可愛らしいお願いが限界を早めたようで、今にも爆発しそうなほどに、射  
 精感が肉棒の先端まで込み上げていた。

「ん、ふあ……イク、イツちゃうっ……あ、ああ、マスター……すぎ、好きっ……♡」

何度も愛情を叫んでくる少女に、こちらも同じだけの言葉<sup>あ</sup>を返す。

互いに極限まで神経が昂ぶり、もはや限界は目と鼻の先まで迫っていた。

「あああああっ、ますたっ、マスター……♡ イク、いくっ、イツちゃ——」

そして——エリセの強烈すぎる締め付けが、瞬間、俺を射精へと導いて。

——ビュルルう、びゆく、びゅびゅうううつつ……!!

「はあ、んああああっ……♡ ああ……ビュクビュクしてる……キミが、私のナカで……出てるっ……んっ、いいよ、ぜんぶ出して……君に、わたしの全てを愛してほしいんだ……」

軽快に吐き出されていく精液。その全てが少女の子宮内へと注がれる。  
身体を抱き合うように密着させた上での膣内射精。

14歳の少女へ行う種付けに、肉棒は何度も悦びを吐き出した。

「んっ……すごい、これが射精……これが、そうなんだ……」

何度もその感触を嘔みしめるエリセ。と、その時。

「この音……」

「終わった……?」

聞き覚えのある曲が耳朶を打つと、壁掛けのテレビには「遊ゲーム終クリア了」の文字が表示されていた。勝利条件を満たしたことで、おそらくは脱出も出来るようになったはずだ。

(良かった……一時はどうなることかと)

無事? にカルデアへ帰還できると知り、ホッと胸を撫でおろす。

ともかくにも、この不思議なゲームはこれで終了だ。

名残惜しい気もするが、これでようやく脱出出来るのだと安堵して――。

「うわっ……!?!?」

「……まだ、できるよね？　せっかくなんだし、もっと楽しんでこうよ」

だがその瞬間、突然ベッドに押し倒され、その上を少女に占領された。物足りなさを告げるような彼女の視線。熱のこもった瞳。ああ、まさか——とは思  
うが。

「あの……エリセさん？」

「……なに？　キミはいやなの？　マスターなんだし、これくらい平気だよね？」

こちらを見下ろす少女には、有無を言わせぬ圧力が感じられる。

蜜壺からは大量の精液を垂れ流し、尚も男のそれを求めて——。

（これが14歳……中学生の性欲……！）

結局、この空間が自然消滅し、強制退去に至るまでの数時間。

自分たちは、何度も身体を重ね続けるのだった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——マイルーム。

今回の一件は、公にはされない、自分たちだけの秘密となった。

その理由というのも、カルデア側は俺たちが消失したことを観測していない、俺とエリセの身体は変わらずカルデアにあった……という事実を聞いたからだ。

「きつと、私たちの意識だけがあの空間に飛ばされていた……んだと思う。現実の時間経過も一秒と無い。肉体的な変化も無いし、ちょっと困惑してる……」

183 「夢みたいない出来事だね。起きたら何事も無かったみたいない……」

エリセと二人、あの時の記憶を振り返る。

現実は何があったワケではないが、確かに自分たちの記憶に刻まれた出来事。

不思議な体験ではあったが、今となっては楽しく振り返ることのできる、そんな思い出だ。

「そうだけど……君がそれでいいなら、まあ……まあ」

すると、何故だか不満な様子をエリセは見せてきた。

何処となく寂しそうで、空しさを嘆く暗い様子だ。

ワケを訊くと。

「いや……これは単なる私のワガママだ。あの時の出来事が、その……肉体的には無かったみたいに語られるのがさ、どうしようもなくイヤなんだ」

「エリセ……」

「一応、私のは……初めての体験だったワケだし、大切にしたいと思って……」

当然の感情だ。彼女でなくとも、そう願うだろう。

無論、俺にとってアレは確かにあった出来事だ。無かったことにはできないし、大切にしたいと思っている。責任なら取らせてもらおうつもりだ。

「はあ……本当に物好きだよね、キミも。でもまあ、そこまで言うなら……うん、君の言う通り……せ、責任は取ってもらおうかな」

頬を染め、エリセは穏やかに告げる。

「今更イヤとは言わせないし、多分そんなつもりも無いんだろうね。だからさ、その……ありがと。面倒なサーヴァントだけど、これからもよろしくね、わたしの……大切なマスターさん」